

文化と交流

No.7 / 2023 年 10 月



-
- 棚田石垣の今昔 石工の旅・・・・・・・・・・内本良夫（1）
 - 企画展「宮本常一関係資料を紐解く」顛末・・・板垣優河（69）
 - 新刊紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・徳毛敦洋（78）
-

宮本常一記念館

表紙写真：「足かけ」のある棚田（山口県周南市小畑）／内本良夫撮影

棚田石垣の今昔 石工の旅

内 本 良 夫

(宮本常一記念館地域交流員)

はじめに

宮本常一先生が昭和14年、西中国山地を芸北から、山口県岩国市の本郷にかけて調査に歩かれ、記録された著書『村里を行く』の中に、次のような一節があります。

「向峠（むかたお）からいったん谷におりてまた坂を登る。谷から道に沿うた一帯は実に見事な棚田でこれが一段一段立派な石垣で築かれている。下から見上げると一枚の石垣の壁に見える。なんとすばらしい仕事であろうと思った。

人が土地を愛する心の結集したものがこれである。まさに驚くべき大事業であり一大偉観である」(宮本常一著作集25『村里を行く』 未来社、

昭和44年6月)

このように書かれ、岩国市後野（うしろの）の石垣棚田について、当時の様子を伝えておられます。

翻って、個人的な趣味の話になりますが、私は棚田の景色に四季折々の魅力を感じ、ここ15年余り、地元山口県をはじめ近隣の棚田めぐりを楽しんでいきます。

こうして訪ね歩くうち、いつの頃からか棚田石垣の石組みに目が向くようになり、そのありようを楽しむようになりました。しかし、棚田の石垣は時代の移り変わりに伴い、残念ながら急速にその姿を消しつつあります。

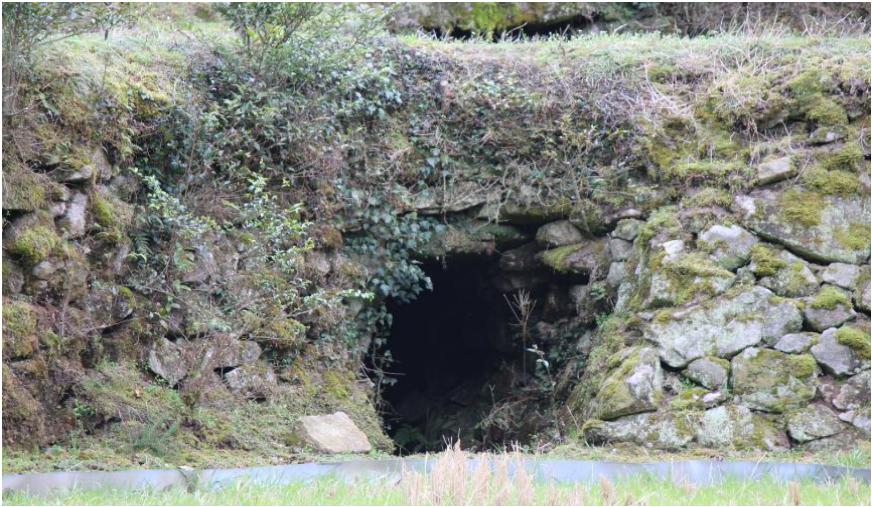
その姿を変えていく様は凄まじく、宮本先生の称賛された後野の棚田も例外ではありません。見事な石垣棚田の景観は、今ではそのほとんどが見る影もなく、ススキと灌木の荒れ野と化してしまいました。

このように、地域の営みや、歴史を物語る石垣が、多くの場所で失われつつある今、その実態に目を向けてもらう。そんなきっかけになればと、このレポートの作成に取り組んでみることにしました。

テーマは二つ、石垣の石組み工法の時代による変化と、「足かけ」と呼ばれる山口県の東部を中心とした、石垣の特殊な石組みについてです。

文中、限られた地域での呼び方を使用したことや、参考資料の学習不足により、誤った記述も多々あると思います。こうした事柄については、今後ご指摘を頂きながら、修正していくことでお許し願いたいと思います。

なお、レポートの作成に当たり、各種情報をいただいた宮本常一記念館・地域交流員諸賢、又、様々な面でご教示いただいた、河村直幸・鳥村健の両氏をはじめ、多くの皆様に心より感謝し、お礼申し上げます。



周防大島町 久賀 畑 能庄スイドウ
室町初期より江戸初期に構築された棚田の施設（少しでも耕地を広くとるため、谷をうめて水路を地下に通してある）。

一 石垣棚田からのメッセージ

私は昭和20年、瀬戸内海に浮かぶ山口県周防大島の農家に生まれました。生家はミカン畑と水田合わせて1町あまりの農地を耕作する専業農家で、小学生の頃から時間さえあれば、兄弟揃って田畑の仕事に駆り出される、そんな暮らしの家でした。

家は江戸時代の末、曾祖父の時に本家より分家しており、明治維新当時はかなり生活は厳しいものであったと思われます。そんな暮らし中で明治8年生まれの祖父九右衛門は、周防大島において当時盛んに行われた海外への出稼ぎに加わり、明治25年(?)にオーストラリア州フイジー島のサトウキビ畑に出かけています。

同じ事業である第2回目の記録の一部を、『山口県久賀町誌』の「第3章第4節 住民の離島」(久賀町誌編纂委員会編、昭和29年3月)から引用してみました。

〈その他の海外移民〉「最もいたましかったのはフイジーへの出稼ぎで、明治二十六年(第二回)に応募したものの全部で二百五十名のうち、その半ば大島郡の者であったが途中日清戦争がおこり、渡航に多くの日数を費やし、現地に至ると共に風土病のために倒れるもの相次ぎ、遂に全員引き上げざるを得ない悲境におちいった。

かくて明治二十八年神戸にかえり来つたもの僅か百五名にすぎぬという多くの犠牲者を出した。久賀町の7名も或いはその犠牲者を出したのではないかと思われる」(祖父の渡航は明治25年の第1回・風土病で多数が死亡したため、記述にある第2回参加者と帰路は一緒の船に乗船し、帰国したものと思われる)

このことは、同じ周防大島出身の宮本常一先生のご尊父宮本善十郎翁も、祖父と同じ帰路の船に乗り合わせていたようで、著作集『家郷の訓』の中にも、命からがら帰国した、荒れた航海の様子

が描かれています。

なぜ同じ船に乗り合わせていたのが分かるかというと、祖父から豪州より帰りの船で嵐に会い船倉にアカ（海水）が入って来たという話を、小学生の頃直接聞いていたからです。

祖父は神戸港に着いたのち、宮本翁のように、金刀比羅宮に生きて嵐を乗り切れたお礼参りをすることなく、周防大島に直接帰島したようです。

このように遠く離れた国の悲惨な出稼ぎ先で、大半が倒れた風土病を奇跡的に生き抜いた祖父は、神頼みより、本人の努力で道を切り開くことが大切という信念の人で、その後83歳まで生き抜き、天寿を全うしました。

そして、フィジーの砂糖黍を食べて痛めたと思われる、歯の口元からよく語られたのは、「賭け事をしてはいけない」ことと「神頼みばかりではなく、働くことの大切さ」でした。

これまで長々と祖父のことを書いたのはほか

でもありません。私の家の主な稲田は、今でいえば全国棚田百選の候補にでもなりそうな、山肌の傾斜地にあり、兄達の話によると、その稲田は祖父の上記オーストラリアへの出稼ぎの蓄えにより、買い求めたものであると聞いているからです。そして、その棚田石垣には今回のテーマの一つである「足かけ」も付けられていました。

また、幼い頃の光景に、棚田石垣の崩れを冬場に父と長兄が修復するのを見ていた記憶もあります。今は荒山になって近づくことも出来ない、狭小な棚田が大切に守られていた頃の話です。

今でも季節毎に各地の棚田を訪ね歩いていると、四季の色合いと土の匂いに、幼い頃の記憶がよみがえり、何とも表現できない、清々しい気持ちになることがあります。民俗学者印南敏秀先生は講演録（平成26年度、八幡生涯学習のむら）の中で、宮本先生の言葉として、「景観には人の意思と営みと、その足跡が刻まれている」という表現

を引用されています。その言葉通り、石垣棚田の景観には先人達の意味と、営みの足跡が記されています。私たちは、その景観の中に、隠された知恵を学び、伝え残すことを、今、求められているのではないのでしょうか。



山口県 周防大島町久賀 今も耕作されている数少ない棚田。

二 石垣を楽しむ・石組みのあれこれ

棚田の石垣に興味を持ち始めたきっかけは、石垣を構成する、石組みの配列に、一定のルールがあるように感じ、更には、それが築かれた時代を、現しているのではないかと考えたからです。それで、各種資料と実際の石垣を参考にしながら、石垣法面の石同士が描く接合線（合端）を基本に、各種分類・名称がされている中で、一部独自の試案により、概略以下のように分類してみました。

1 石組みの原点「布積み」・「布積み崩し」

世界のいたるところで古くから積みまれている石組みです。呼称は平積みにした石が、布を畳んで重ねたように、横に平行線を描く、その形から「布積み」と名付けられたようです。中でも、レンガを積んだように横目地が横一線に揃ったものを「布積み」と呼び、石材に大小があり横目地がランダムになったものを「布積み崩し」としてここでは区分しました。これらの石組みは日本で

独自に生まれたものではなく、古墳時代、朝鮮半島から伝えられたものと思われ、今も古墳の石室として現存しています。

更に、7世紀に百済人が関係して築いた古代の山城と言われる、山口県光市にある石城山の神護石（こうごいし）の石壁は明らかに整形された石が「布積み崩し」の工法で積まれています。このような「布積み崩し」の石垣は、今でも至る所で見かけますが、棚田石垣で見るとは稀で、時おり周囲が「乱積み」や「谷積み」で構築された中に、古くから残された石垣として見る事があります。但し、「布積み崩し」は石組みの中でも初歩的な工法で、農家自身の手でも築かれています。従って、棚田石垣に構築されたのは、「谷積み」の導入される時代より前に築かれた古いものか、又は、比較的新しい時代に、農家自身が自力で積んだ石垣のいずれかの可能性が高いものと思われる。

（右） 山口市吉敷 凌雲寺跡石垣（大内氏の遺跡）（下）北広島町 吉川元春館跡擁壁
何れも室町時代から安土桃山時代の石積で、吉川元春館の石積みは京都の公家屋敷の流行りを真似たとされます。ここではいづれも「布積み崩し」として分類しました。





（上）光市 石城山神籠石（下）山口市宮野 平積みに石材を組んだ棚田の石垣。本レポートでは何れも「布積み崩し」として分類。



2 石の形に合わせて積み上げる「乱積み」

法面の石同士の接合線が、縦横斜めと縦横に線を描くのを「乱積み」として分類します。「乱積み」石垣には、家石垣に見られる高度に加工された切石による石垣と、田畑の自然石（野面石）による田畑の「乱積み」石垣とでは、大きく様子が違います。そのため、加工度合いにより、野面・割石・切石の三段階に区分します。なお、色々な石組みの要素を含んだ石垣も「乱積み」として分類します。そして、構築の年代は「ヤクバ」などの特殊工作の部分に想定します。



垣田石田の兼久市防
垣上積み「乱積み」石
石の野面を取り込んだ
野面石の「乱積み」石
垣。

3 石組みの独創的工法「谷積み」・「矢筈積み」

大陸より伝わったものの中に屋根瓦がありま
す。伝来したのは丸瓦と平瓦の2枚を組み合わせ
て屋根を構成する、本葺きと呼ばれる寺院など
に見られる瓦屋根です。この葺き方に革命をもた
らしたのが、1枚で2枚分の役目を果たす、片方
山形になった棧瓦です。今でもよく見かけるこ
の屋根瓦は、江戸時代の後半（18世紀末頃）に大
津の木工・西村半兵衛が発明したと言われ、江戸
時代後期、瓦屋根に対する幕府による規制の緩み
と相俟って、瞬く間に全国に広まった画期的な
瓦です。

この発明に匹敵すると思われる、独創的な石垣
の組み方がこの「谷積み」と言われる工法で、世
界でもあまり例のない石組みとされます。そし
て、この石組みは明治時代以降、石工の出稼ぎに
より、朝鮮半島や大陸でも築かれたものと思われ
、先日北朝鮮のことを伝えるテレビ番組の中で、

背景に「谷積み」の石垣と思しき石組みが映っていました。この工法は、江戸時代初期、元和年間（1615～1623年）にはあったと記載され（北垣聰一郎『石垣普請』、その後、江戸後期になって盛んに築かれるようになりました。この石組みは「乱積み」石垣から派生したものと思われ、

「落とし積み」とも呼ばれる工法です。便宜上ここでは切石や間知石により長方形に形を整え、二方向だけに接合線を描く「落とし積み」石垣を「矢筈積み」とし、野面石や割石により、形の違ったほぼ同じサイズの石材の組み合わせによる「落とし積み」石垣を「谷積み」として分類しました。参考までに、「矢筈積み」の発達については『石積みの秘法とその解説』（昭和33年初版発行理工図書）によると、明治30年代、中央線笹子トンネル付近でレンガ状の石が採石され、それを「うたてがえし積み」と呼んで矢筈に積んだのが「矢筈積み」（矢羽積み）普及拡大の始まりだとする話が書

かれています。真偽はともかく、この頃から急速に普及拡大されたことは間違いありません。何れにしても、原点である「谷積み」は画期的な石組み工法であり、間詰石を使わなかったため、海の波や水の流れにも強く、波止場突堤や、河川の護岸としても多く築かれています。

ここでは「谷積み」と「矢筈積み」と二つに分けましたが、本来この工法は親子のような関係で、「矢筈積み」は「谷積み」から生まれた石組みと思われまゝ。又、「谷積み」は優れた工法として江戸時代後期、城石垣でも築かれています。私の知る限り、名曲「荒城の月」で有名な大分県竹田市の岡城址をはじめ、下関市の勝山城・長野県佐久市の龍岡城五稜郭・函館五稜郭・名古屋城などです。中でも岡城址の「谷積み・矢筈積み」石垣は明和8年（1771年）の大火以後に修復構築されたものらしく、城石垣で本格的に採り入れられた「谷積み」の構築は貴重な例と思われます。



防府市久兼「谷積み」



周防大島町 「谷積み」による新しい石垣（上段）と半土坡による「布積み崩し」の古い石垣（下段）。



周防大島町安下庄「矢筈積み」

なお、「谷積み」の要素の石垣は、ほかでも時おり見られ、世界遺産フィリピンのコルデイレラの棚田石垣にもこの工法が一部見られるようです。

三 石垣各部の工法により構築時代を探る

先に石垣法面の大まかな変化について見てきましたが、更に石垣各部に、時代を示す特徴を探してみました。但し、石組みの工法は時代や地域により複雑に入り組み、一定ではありません。そこで大まかな推定方法として、例えば「谷積み」は江戸後期からが中心で、江戸時代以前には組まれていませんから、江戸時代以降の構築と判断します。そして、石の加工度合いや、地域の歴史も照らし合わせるなど、各種の情報を重ねて考えてみます。正解、不正解の問題ではなく、あれこれ想像しながら楽しんでみるのも一興です。

隅角部

* 算木積み

石垣の隅角に石の長短を交互に組

み合わせた積み方。安土・桃山時代より明確に採り入れられ、耐震効果は熊本地震でも櫓を支え証明された。棚田・石垣でも長短の組み合わせが生かされていることがある。

勾配

*** 勾配** 石垣に傾斜をつけて重力の配分を図る。主に安土・桃山時代より始められた。隅角石は切石が多く使われ、勾配は主に次の三種に区分けされる。

*** 棒勾配** 隅角の傾斜が直線を描く。同じく法面の直線勾配が描く面は棒法。

*** 寺勾配** 傾斜の下を緩やかに、上に行くに従って急にして最上部を直角とする（お寺の屋根を連想）。

*** 宮勾配** 寺勾配の上部がさらにせり出すような形。下部は緩やかな傾斜で扇形を描く（お宮の屋根を連想）。



熊本市 熊本城 櫓を支えた隅角部の算木積み（見た限り櫓台は法面の中央部上端から崩れやすいよう）。

上辺部

*** 天端石** 石垣の上辺部が直線になるように並んで配石された石組。主に間知石で矢筈に組んだ石垣や切石の谷積みに用いられる。五角天端・夫婦天端・三角天端などの名称で呼ばれ主に「谷積み」「矢筈積み」に見られる。

石材

*** 加工度合い** 石材による時代推定はできないが、基本的には時代が進めば、より加工レベルは高くなる。矢穴による石割の技術は、東大寺の再建を進めた重源上人が、1181年南宋より宋人石工を招き、その技法を伝えたと、公益財団法人元興福寺文化財研究所の坂本氏は述べている。
（上から概して古いと思われる順に）

- ・ 矢穴大↓矢穴小↓発破↓ドリル穴↓薬品穴
- ・ 野面石（自然石）↓割石↓切石↓間知石

（棚田で大きな自然石をそのまま築石として取り込んでいるのは開拓当初の石組みの可能性が

高い

*** 石組み** 上側の法面に大きな石が使っている場合や、上下で石材や石組みに違いがあるときマチダオシがされた可能性が高い（人の手が届かない高い棚田石垣は、その多くが江戸時代後期以降の構築と思われる）。



岩国市 大原の民家石垣

天端石のある「谷積み」の家石垣。一部石材加工の進化に伴い、上辺部が五角天端等に形を整えてある。

素材

*** 粘積み** 石垣を組む時にセメントや漆喰などの練り物で石組み間隙を埋めたもの。時代区分は新しくここでは取り上げない。海外では殆どの国がこの工法。最近組まれた石垣の大半が粘積み。

*** 空積み** 石だけを使った石組み。水はけを必要とする棚田石垣などに適している（戦後国の石垣工事は、コンクリート練積み指定になって空積みは衰退したといわれる）。

付帯構造

*** スイドウ（水道・水洞）** 棚田の石垣に設けられた石組みで中を水が流れる暗渠。目的は主に棚田の水路を地下に通し水田面積をより広くする工夫。出水口の形状から構築の新旧を判断する。

法面（のりめん）の石組み分類（二の項と重複）

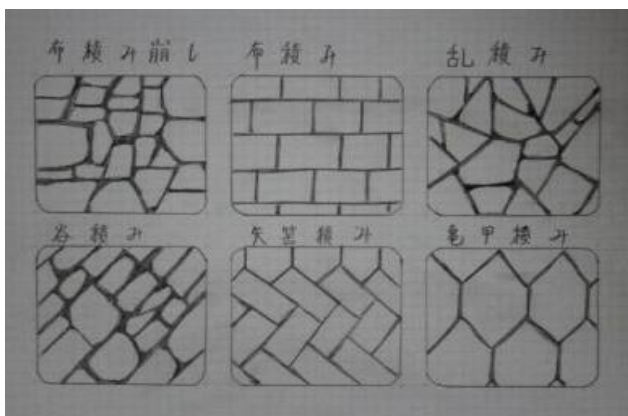
地域により様々な分類表現がされており諸説あります。ここでは棚田の石組みをテーマとしていますので、分かりやすくするため、簡略化し、

試案による分類表現としました。それは、二の項で述べた通り、築石同士が接合部で法面に描く線を基本としたもので、便宜上の区分であり学術上の裏付けはありません。それに加え、石材の加工度合い、野面石・割石・切石・間知石を頭に付けた呼称です。例えば「野面石の布積み崩し」のよう表現します。

*** 布積み崩し** 石材を水平に近い形で積み重ねるため、上下の接合部は多くが平行線を描くが、全体では、石材の大小や形が不揃いなため接合線が縦横斜めと不定になる。

*** 布積み** 石材同士の接合線が横に一本線を描き、石材の縦線と横線が品の字を描く（レンガ積み）。

*** 乱積み** 石材の大小や形の不揃いのなものを自由に組み合わせるため、接合線があらゆる角度を描く。一部「布積み崩し」や「谷積み」と同じ接合線を描くものも「乱積み」を含む。



上段左より ①布積み崩し ②布積み ③乱積み
下段左より ④谷積み ⑤矢筈積み ⑥亀甲積み

***谷積み** 左図④の通り、石材の先端を山形に並べた下石の谷に斜めに落とし込みながら並べ、積み上げて行く工法（落とし積みとも）。

***矢筈積み** 谷積みの発展形で長方形、又は方形に切り揃えた石材の接合線が、下石と斜め直角に交わるように並べ、落とし込んでいく工法。

四 「足かけ」との出会い

「足かけ」に興味を持つようになったのは、その呼び名からでした。それは私の郷里（山口県周防大島）では、田畑の少し高い石垣には、いたる所で見かけた石組みです。

しかし、私自身、棚田全体の景觀に関心は持っていたものの、「足かけ」については、さほど気に留めていませんでした。ところが、周防大島町の文化事業である「先人の旅」で町内の旧跡を訪ねた折、案内役の郷土史家・金本豊氏から、段畑の石垣から突き出た石組みを前に、その名称を久賀では「アブチ」呼ぶという説明がありました。その呼び方を聞いてからというもの、何故かその存在が氣に掛かるようになり、見かけると幼馴染にでも出会ったようで嬉しくなり、さらに興味が増すようになりました。しかし、残念なことに、年を追って荒れていく棚田石垣とともに、「足かけ」もその多くが姿を見せなくなりました。



周防大島町久賀 庄地の「足かけ」 近隣に市楽の棚田スイドウや古墳もあり古く歴史のある地域。

1 「足かけ」の誕生

「足かけ」は何故棚田石垣に付けられるようになったのか。それには先ず「足かけ」を必要とする、高石垣が築かれた背景と時代を知らなければなりません。

それは主に、江戸時代の藩の財政逼迫により、米の増産が求められたことに起因します。

この要求に対して、山間部の稲作農家は、山の急な斜面を開拓して棚田とする方法を取りました。結果、高い石垣の棚田が、山肌に築かれることになりました。

併せて、稲田の生産効率を高めるため、複数の小さな棚田を合わせて一枚に作り変える「マチダオシ」（改田）が行われた結果、稲田に高い石垣が築かれることになりました。

こうして、高くて手の届かない、高い石垣が築かれましたが、谷積みなどの石組み工法や石材の加工技術の進化により、石垣法面の石と石の隙間



唐津市 日本の棚田石垣で最も高いうちのひとつと言われる蕨野(わらびの)棚田石垣。高さ8.5メートル。昭和の初め10年の歳月をかけて築かれた。野面石のため法面に隙間があり 作業用足場が確保されている。一部飛び出した足場石もある。
(日本の棚田百選)

が狭くなり、足をかけることができないため、登って行う管理作業が困難になりました。
そこで石垣法面に、作業用の足場として「足かけ」を付けてみたところ、それが便利なので、ほかでも倣って付けられるようになった、そんな経緯ではないでしょうか。

2 「足かけ」の役割と機能

「足かけ」の主な役割は前にも書いた通り、高い石垣の草取りなどの管理作業を目的としましたが、加えて「足かけ」には次のような機能も考えられます。

日本で最も高い農業用石垣の一つと言われる、防府市久兼上の棚田を耕作されている山本喜行氏によると、他よりも控え（奥行き）の長い「足かけ」石を石垣法面に差し込むことにより、石垣は上端から崩れる事が多いので、それを途中で食い止める役割を果たしていると聞きました。その延長線上で考えると、「半土ハ」（下半分が石組みで上部が土作り）の石垣では、石組みの最上部に置かれた「足かけ」が、上部の土の崩れを堰き止めて、畦畔を守る役目を果たしているように見えます。

このほかに、設置の目的として、周防大島町久賀東部の東郷山西向き斜面、段畑地域の「足かけ」

は、その地域のほとんどが下からではなく、上端からほぼ一定の間隔で設けられています。それは比較的低い石垣にも同様に設置されており、ここでは、おそらく上下の耕地での境界線の役割、つまり草刈りなど、作業区分の目印の役目も果たしているものと思われます。

それは、この地域が開拓され圃場整備されたのが、明治時代のほぼ同時期のことから、作業分担の範囲を明確にするため、話し合つて築かれたものではないでしょうか。

また、設置の目的としてある場所では、出稼ぎの石工が周辺の石垣の構築は「足かけ」の独自技術を持った、自分達の仕事であることを記し残すため、設置したのではないかと思われる記念碑的「足かけ」もあります。そして更に、周防大島の属島・浮島の段畑石垣には石垣の見栄えを良くするために、わざと最上部に付けられたのではないかと思います。「足かけ」状の石組みもあります。



周防大島町久賀東郷山の石垣 上端から一定して揃った位置の「足かけ」。

周防大島町浮島
「足かけ」
設置の目的は？



3 「足かけ」の分布

参考資料が絶対的に不足していることは承知の上で、「足かけ」について自分なりに歩いて感じた事を書いておこうと思います。

現実に、昭和20年代の集落や里山を写した写真と実際の景色を比べてみると、その違いは別の場所かと思うほどです。特に石垣棚田のあるような農地の荒廃はすさまじく、「足かけ」はもとより石垣を見つけないことさえ困難になっています。それに加えて地域により圃場整備事業で棚田石垣はほとんど姿を消して、「足かけ」が存在したかどうかとも判りません。

特に山口県柳井市を中心とした地域の棚田に「足かけ」は数多く設置されていたと思われますが、圃場整備事業が進み、見つけることさえ困難になっています。

この様な周辺部の状況にありながら、周南市四熊ヶ岳周辺の棚田は、きれいな石垣を奇跡的に残

している稀な地域です。それは多くの農家の方々が、これまで平日は海沿いのコンビナート地帯で働き、休日や週末に農作業に従事してくれたおかげではないでしょうか。

この様な状況下、山口県以外で「足かけ」を見つけることができたのは、福岡県のうきは市の新川沿いの棚田、島根県益田市大井谷の棚田、広島県安芸太田町井仁の棚田、兵庫県岩座神の棚田とほんの僅かです（階段状になった「足かけ」のある石垣はこの中を含みません）。これからも「足かけ」についての情報があれば、できるだけ書き加えていきたいと思います。

「足かけ」の有る無しは地域の中でも分かれ、例えば「足かけ」が数多くある、周南市四熊ヶ岳の棚田地帯の西隣にある四郎谷や、椿峠を越えた防府市富海地区の石垣には「足かけ」がありません。なぜここまで明確に、場所により「足かけ」の有る無しが分かれるのか、様々な理由が考えら

れますが、この件については、出稼ぎ石工の活動とも関連して、今後の課題としたいと思います。



周南市 山口県棚田20選に選ばれた四郎谷地区の棚田石垣。
「足かけ」は無く、上辺部が石できれいに縁取りしてあるのが印象的。

4 「足かけ」の呼び方（名称）

周防大島町の『東和町誌』第4巻（印南敏秀著、昭和61年3月、203頁）に次のように書かれています。「旧東和町では素人積みが多かったことは高い石垣の中途に点々と突き出した足置き石が東和町に少ないことから言えそうである。この石を久賀町では「アブチ」と言った」。また、郷土史家金本豊氏も「アブチ」と話されています。それでは何故その呼び方を使わず、今回「足かけ」と言う表現にしたのか。それは『庶民の発見・変わりゆく村』（宮本常一著作集21巻、未来社、昭和51年3月、79頁）に、「西日本ではだいたい段々になった田の場合、上の田のアゼのはしが境のようである。多く『アブチ』と言っている」と書いておられ、アブチと表現すると、畦畔の上部淵端と混同する恐れがあると考えたからです。



島根県吉賀町 大井谷 春の畦（畔）づくり。

そして、『平成二十六年度八幡生涯学習のむら講演録』の中でも、印南先生と会場の質疑記録に、会場からの質問を「アブチ（足かけ）」と（ ）付きで書かれていますので、あながち「足かけ」も間違いではないと思われます。いずれ、どのように呼ぶかは別として、これまで各地で聞いた呼び方と、手にした資料では次の通りとなりました。

聞き取りは、農作業をしている農家の方や、玄関先の立ち話で聞いたことであり、思い付きで答えられた可能性もあります。従って、この呼称がその地域の通称とは限りません。

【呼び名】・地域名・証言者・記載書籍

【足場石】・旧徳地町発行ガイドパンフ『棚田のふるさと徳地町三谷』より。

【中段】・萩市矢代・（なかだん）玄関先で年配の女性より。

【道石】・周南市井谷・農家のご主人より。

【さし石】・井谷・農家のご主人より。

【アブチ】・久賀・「先人の旅」道中の説明で久賀ではこのように呼ぶと金本豊氏。あわせて、通称、足場石と呼ばれると説明されました。

【アブミ】・久賀・友人の尊父は明治生まれの騎兵でこのように呼ばれたそうです。

【足置き石】・印南敏秀先生は著書『東和町誌』第4巻（昭和61年3月）の中で「久賀ではアブチと呼びます」と書かれながら、説明書きではこのように書かれています。

【足かけ】・久賀・在住の知人3人より。

・平成26年宮本常一資料保存研究協議会企画編集発行講演録冊子。

【チュウダン】・久賀・姉の記憶によると父親はこのような呼んでいたようです。また、嫁ぎ先の庄地在住の義母も同様に呼んでいたとのこと。

【にんじゅう】又は【とび重】・兵庫岩座神・家の光協会発行『全国棚田ガイド』（平成29年10月）で「踏み石」と注釈付きで書かれています。

【踏み石】・福岡県葛籠・『棚田その守り人』（中島峰広著、古今書院、平成24年、170頁）

【渡り石】・広島県安芸太田町・『井仁の棚田』の中で民俗学者神田三亀夫氏はこのように書かれています。

【改良型の武者走り】・石垣を讃える会の佐々木卓也氏は第6回「棚田の石垣の歴史」の平成22年11月講演録の中でこのように話されています。



周南市 小畑の「足かけ」と谷積みによる見事な石垣法面。

五 「足かけ」のある風景

先ず、多くの「足かけ」が見られる周南市の四熊ヶ岳周辺、山麓の棚田石垣から訪ねてみたいと思います。

周南市四熊ヶ岳周辺・小畑（おばた）

四熊ヶ岳南東斜面に開かれた棚田集落で、日本を代表する石垣棚田の一つと言っても過言ではないでしょう。個人的には、なぜ日本棚田百選に選ばれなかったのか不思議でなりません。

まさに南米インカ帝国のマチュピチュを連想させる、「瀬戸内のマチュピチュ」とでも名付けたような、石垣棚田の景観です。

こうして世界遺産に登録されても不思議ではないような、棚田石垣はいつの時代に構築されたのでしょうか。

それは、ここ小畑広谷地区の最上部、棚田を潤す湧き水「金名水」から少し下った所にある、集

会所傍の石灯籠にヒントがあるものと思われる。灯籠には江戸末期の天保8年（1837年）の年号が読み取れ、それは、毛利藩による財政立て直しのための、産業振興策による稲田の整備事業が勧められたことと関連して寄進されたのではないかと考えられるからです。

それは、稲田とするには困難と思われる急な斜面の状況からも、築かれた石垣はかなり高度な技術を必要とするもので、強力な後押しがあった造事業と思われる。「割石の谷積み」の石垣は、今でもほとんど狂いが見られず「足かけ」が見事に連なっています。

なかでも最も長いと思われる棚田石垣の法面には、「足かけ」が百個以上も連続して並んでおり、見事な景観を見せています（下記掲載写真の棚田、現在一部は耕作中止）。



周南市 小畑、春の棚田風景



周南市 小畑 「スイドウ」のある石垣



周南市 小畑 春の棚田石垣

周南市四熊ヶ岳周辺・井谷（いだに）

ここ井谷地区は、四熊ヶ岳の東部中腹のなだらかな谷あいにある、いかにものどかで豊かな地域です。谷の正面、集落の上方に祀られた、諏訪神社の近くにある石室から、15世紀末の年号が読み取れ、古くから開けていたことが分かります。また、集落内には他ではあまり見かけない、石の小さな祠が道路わきに残されていたりして、地域の信仰のありようを偲ばせます。

そして、家石垣の様子からも、豊かな集落の様子が読み取れます。中でも集落内で見られる見事な家石垣は、切石の石材から想像して、明治から昭和にかけて、米が高値で取引された時代に金に糸目をつけることなく、築かれたものと思われれます。

さらに、諏訪神社近くの「足かけ」のある見事な柵田石垣も、同じ時代にマチャオシのため多額な資金を投じて、築かれたものと思われれます。そ

れは、反りを持たせた石垣の法面はもとより、「足かけ」そのものの設置が横並びに良く揃っており、到底素人の手によるものではない事が分かるからです。この見事な柵田の所有者の方からは、四熊ヶ岳には採石場もあったとの話を聞くことが出来ました。

ここ井谷には、隣の庄原地区へ越える峠の頂上近く、自家の柵田を耕作されるだけでなく、石垣の修復や建設も自ら手掛けられる、兼重和剛氏が住んでおられます。ご自宅を訪ね数回にわたり話を聞くことができました。

なかでも四熊の地名の由来は神武東征に際して、一行がこの地方に滞在した時に、4頭の熊が神武の前にひれ伏したことから、四熊という地名になったという話を聞きました。

この話、4頭の熊、実は4つの地域の代表者4人を指しているのではないのでしょうか。そして、神武一行が半年間この地に滞在したのは、豊かな

米の収穫を待つて、兵糧を確保したためではないかと考えられます。四熊ヶ岳周辺にはそれだけ稲作による、豊かな集落が存在していたのではないのでしょうか。伝承ながら、四熊ヶ岳周辺の棚田と家並みは、そんな物語を彷彿とさせる、豊かな景観を見せています。

また、兼重氏の話によると、この地域の裕福な家では、棚田石垣を維持管理するために、毎年6俵の米を別に確保していたということです。それだけ石垣が大切に守られていたことの証でしょう。また、昔は娘の嫁ぎ先を決める条件として、毎食米を食べられる家であるかどうか嫁入り先の基準になっていたそうです。それだけ経済的に恵まれていたといえるのではないのでしょうか。そして、井谷の集落は兼重家の前の小川を境に安山岩と花崗岩に地質が分かれることや、「布積み崩し」の石垣のことを指して「イタチが餅を積んだような」と表現することなど、幅広くお話を

聞くことができました。

余談になりますが、こうした石垣棚田を守る人を訪ねる度に思うことは、石垣が大雨による防災に果たす役割についてです。特に四熊ヶ岳周辺の棚田石垣は水害の防止のために、大きく貢献しているように思えます。

それは、棚田自体が豪雨に対して、ダム役目を果たし、水量の調整をしているからです。そして、堅牢な石垣は土石流の発生を防ぎ、勢いを削ぎ、大雨による、甚大な被害を食い止める事に役立っているからです。

棚田は管理さえすれば、食料の供給だけでなく、防災の役目も果たしていることを、しっかりと社会全体で評価して欲しいものです。

今、各地で耕作放棄された棚田石垣が、猪により深く傷つけられて、一雨降れば崩れかねない状況を目にします。

管理された棚田石垣は力強い防災施設です。石



周南市 井谷の民家



井谷集落諏訪神社前の石室
1498年の年号がある。

垣法面の面積に応じて加算支給する支援金制度を設けて、農家に石垣柵田の維持管理を推奨すれば、防災面でも必ず役立つことになると思います。是非とも砂防ダム建設だけに予算を組むのではなく、柵田石垣の役割について、防災面からも評価して、支援して欲しいものです。

【提案】耕作放棄しても草刈りだけ続ければ当面石垣は守れます。ツアー会社と連携して「草刈りボランティアツアー」を企画してみてもいい。



(上) 周南市 井谷「足かけ」の付けられた見事な柵田石垣。
(下段パイプより手前法面の石組みに、他との違いが見られる)

(下) 井谷 中央付近 様々に修復されたと思われる石組みで、長い歴史を物語る。





周南市 井谷 二段に「足かけ」のある石垣。



周南市井谷 井谷の古い歴史を物語る石垣。



NHK テレビ番組より、水量を分散して水害を最小限に食い止めた石垣棚田。



井谷 自家の棚田を背景に兼重和剛氏。



周南市井谷 見事な「足かけ」の連なる諏訪神社そばの棚田石垣。

周南市

四熊ヶ岳周辺・庄原（しようばら）

この両地区は四熊ヶ岳の北東斜面に開けた棚田地帯で、古くから集落が開けていたものと思われる。

それは、南北朝時代の後期応安7年（1374年）の銘文のある地藏石仏が817人もの多くの人々により結縁され祀られていることから明らかです（『東和町誌』第4巻、印南敏秀著、山口県大島郡東和町、昭和61年3月）。

庄原地区を取り上げたのは、先の兼重和剛氏が教えてくれた「イタチが餅を積んだような」という「布積み崩し」の石垣と、「谷積み」工法の石垣が上下の段に分かれて見られるからです。

このように、四熊ヶ岳周辺の棚田地帯はまさに石垣棚田博物館の様相を呈しており、西隣にある周南市四郎谷の棚田地域と合わせて、未来に残していきたい貴重な棚田の景観です。

なぜ棚田石垣が貴重なのか。それは、その石一つひとつを運び、築き守り伝えた先人たちの生活や想いが込められており、様々な時代の生業のあり方を思い起こさせてくれるからです。

そして、何よりも現代史の中で、戦後の経済成長を支え、今の社会を形作ったのは、棚田の耕作や石垣の構築など、厳しい労働環境が育んだ人々の勤勉さです。

その、労働意欲に支えられ成長した企業と社会には、その人々を育てた象徴とも言える、棚田石垣を守り伝える責務があると思います。

そして何よりも、林立するコンビナートの煙突と隣り合うように開けた、四熊ヶ岳周辺の棚田の景観は、現代史の貴重な遺産ではないでしょうか。



周南市 庄原地区の棚田石垣 上下の石組みの違いが時代を物語り興味深い（現在は休耕地）。

山口市徳地 三谷（みたに）

防府市を流れる佐波川の支流、三谷川の谷筋に開けた美しい棚田集落です。

山口県内でも棚田を守る活動の盛んな地域であり、今は残念ながら終了してしまいましたが「三谷いしがき棚田会」という、棚田オーナー制の組織がありました。私も平成26年度よりオーナーの一人に加えてもらい、会の解散までお世話になった思い出深い棚田集落です。

付近には、12世紀後半、奈良東大寺再建に尽くした重源上人ゆかりの旧跡や、棚田の地名に開拓者兄弟の名前が残されている地名など、古い歴史を物語っています。

これらの話はオーナー田提供のお一人であった奥野利夫氏（昭和6年生まれ）からお聞きしたもので、加えて次のような話もありました。

- ・奥野氏のご尊父ご母堂の時代の話として、ご母堂が集めておいた石を、ご尊父が石垣として築

き、段畑を稲田に作り変えたこと。

・奥野氏が子供の頃、ご母堂から、隣家には自家の石垣普請で助けてもらったのだから親切にするように話されたこと。

・男の日当は、陽が出て沈むまで働いて米1升2合と決められていたこと。

・上の庄屋さんの石垣の大きな石は米一俵に値すること等々、お聞きしました。

このような話は、米が生活の基本であり、石積みは欠くことの出来ない構成要素で、地域のコミユニティづくりに必要なものであったことを物語っています。

中でも興味を覚えたのは、昭和の初めに築き直されたと言われる、棚田の中心部の立派な石垣に関する話でした。

その石垣は昭和の初め頃、棚田の持ち主により大金をかけて改修されたそうですが、その後コメの価格が暴落し、その所有者の方は朝鮮半島に渡

って行かれたとの話です。

棚田の畦畔整備はそれだけの大事業であったことに加えて、米の価格が生活を左右する重要な要因であったことを物語る事例と言えるのではないだろうか。

別の観点からの話になりますが、この地域の石垣工事に携わった石工は、琵琶湖の疏水事業にも関係した、との話を耳に挟みました。この話は石工の出身地を考える上で、大切な情報になるものと思われます。それは、明治時代に建設された、琵琶湖疏水の請負業者として、周防大島の石工棟梁福田亀吉が、明治23年に完成した第一疏水の工事に、270名を率いて携わった記録が残されているからです。

そうした中で、旧三谷小学校前で三谷川を渡った、棚田の東奥石垣には整形された石の「足かけ」が綺麗に並んでいます。この「足かけ」はその様子から実用としてだけではなく、工事に携わった



三谷石垣棚田会オーナーによる田植え（現在は行事終了）。

石工たちの出身地の得意技を示す標しとして、築かれた可能性もあると思われます。以上のことなどから、この「足かけ」は、琵琶湖の疎水工事に携わった、周防大島の石工と、何かの繋がりがあつたのではないのでしょうか。



山口市 三谷の棚田石垣 上の段、谷積みの法面に整形された「足かけ」がつけられている。

防府市 久兼（ひさかね）

久兼地区は、棚田石垣の歴史を物語る展示場と言っても過言ではないような地域です。防府市を流れる佐波川の支流久兼川のゆったりとした扇状地に開けた棚田地帯であり、「足かけ」は東の山肌斜面に築かれた高い石垣に見られます。

そのことは、扇状地中心部の棚田石垣は古くから築かれた低い石垣であり、それに対して「足かけ」のある東山側斜面の石垣は、新しい時代に開拓され、高く築かれたものと考えられます。

ここ久兼で、棚田の上部地域に住んでおられる農家のご主人（80歳代と思われる）から聞いた話です。東側の急な斜面の高い石垣は「野面積み」で、周防大島の石工が築いたものとのこと。今は休耕地になっており、石垣も「足かけ」も、雑草とつる草で覆い隠されて、その形をはっきりと見ることはできません。

「ご本人は石積みの呼び方を「野面積み」と記憶

されており、その年齢と話の内容から、「足かけ」のある石垣は、ご尊父の時代、明治から昭和にかけて築かれたものと思われます。

更に、築いた石工のことを、周防大島の石工と記憶していました。他の地域では多くの場合、広島の方から来た石工と話されることが多く、周防大島の石工と聞いた時には、思わず嬉しくなりました。

当時の石工が「野面積み」と話したのは、石材の加工度合いだけではなく、石を見立てて配石を決め、石同士が表面より、奥でかみ合う丈夫な石垣を表現したものと思われます。

防府市 久兼 上部地域 東山
側「足かけ」のある石垣。



防府市 久兼 上（ひさかね かみ）

久兼より久兼川に沿ってしばらく上ると、右手に城石垣かと思うほどの高石垣が見えてきます。案内板には高さ10・5メートルで農業用としては日本一と表示されています。訪ねた日、その高い石垣の上端から牛が顔を覗かせていました。

これまで日本一高いと言われる農業用高石垣を、佐賀県藤野の棚田石垣や宮崎県日之影町戸川の石垣などに見てきました。高さ比べはともかく、何れも個性豊かで見ごたえがありますが、中でもここ久兼上の石垣は、その中央部に「足かけ」が階段状に設置されており、上端まで続くその大きさと迫力は、寺勾配の法面と合わせて、見事というほかありません。

石組みは「割石の谷積み」で、一目で優れた石工の仕事と分かります。そして、築造当初から「足かけ」は階段として、石垣築造にも役立てられたのではないのでしょうか。

その高石垣に沿って左に曲がると右側が谷間になっており、向かい側にさらに高い石垣がそびえ立ち、その上に日本家屋の瓦屋根が見えてきます。その組み合わせは、まさに時代劇の城郭を思わせる景観です。

その家のご主人、山本喜行氏にお会いして、お話を聞くことができました。先ず、見下ろして歓迎してくれた牛の話です。

山本家では棚田を放牧地として活用しておられ、数頭の牛を飼っているそうです。その話をしている間、先程まで棚田に放牧されていた牛たちが誰の付き添いもなく、玄関脇で話している私達のすぐそばを通って、通路の奥に消えていきました。そのことに驚きながら聞いた話によると、「先ず、賢い牛でないところでは生き残れない。それは高い石垣に囲まれた地形の中で、牛が足を踏み外したらそれまでだから」とのこと。しかし、ここでは放牧された牛の中にリーダーがいて、そ

の牛は特に賢く、ほかの牛が安心して草が食べられるように、見張りの役もするのだそうです。それで納得。先ほど石垣の上から見下ろしていた牛が、まさにそのリーダーでした。

この様な崖のある棚田で牛が飼えるのも、30年以上の経験と、独自の牛を育てる技術があるから出来る事で、山本家ならではの話のようです。

話が石垣のことからそれましたが、次のような話も聞くことができました。

山本さんは昭和20年の生まれで5代目にあたり、2代目のご当主の頃に高石垣は築かれたのだろうとのこと。石垣構築当時の話として、石工は一人、広島の方から来られる人で、毎年冬になると「今年もきやんした」と挨拶されて仕事に取り掛かれたそうです。本人の担当は食事付きで米1升、後は集落の人が手伝いながら、共同作業で数年かけて高石垣を築き上げたとのことです（構築年代は不明）。



山口県棚田20選 久兼上の
看板と上から見張る牛。



防府市 久兼上 城壁のような石垣に囲まれた山本邸。



農場オーナー 山本喜行氏。



階段状に「足かけ」の付けられた石垣。



防府市 久兼上 棚田に放牧された牛。



下松市 米川 春の棚田石垣。

下松市 米川 瀬戸（よねかわ せと）

70代と思われる所有者の方から話を聞くことができました。「足かけ」のある石垣は前の所有者の時からのもので、その工法から、明治から昭和の初めにかけて築かれたものらしく、崩れを知らないとのこと。石垣に草がほとんど生えてないのは、石垣に除草剤を使用しているからだそうで、「足かけ」は周辺では見かけないとのこと。

周南市 市原（いちばら）

「足かけ」より上部に大きな石が使われているのは「マチダオシ」のため、高石垣を築いた際に、「足かけ」が付けられたものと思われます。

棚田石垣のある東隣の樋口ダム公園の谷筋には「足かけ」は見当たりませんが、この地域では「足かけ」の付いた石垣は多くないものと思われま



周南市 市原 「足かけ」のある棚田。

萩市 矢代（やだい）

萩市の山あい、矢代集落で最初に目につくのは、家石垣の「足かけ」です。民家の家石垣に「足かけ」が付けてあるのは珍しく、更に、その一部は鉄の棒で代用されています。

この民家石垣の法面は、小型の野面石の谷積みで築かれており、「足かけ」には板状の薄い石が使われています。

矢代の集落にはこのほかにもいたるところで「足かけ」を見かけます。周囲の他地区には余り見られない「足かけ」が、ここに集中しているのは不思議です。

但し、宮本先生は戦後間もなく、ここより萩に向かう道の途中から阿武川の川筋を上った村、（旧）川上村を訪ねておられます。そして、ダムの建設で村が水没する前に、村の老石工より聞いた話として、周辺の土作りの畦畔を石垣にしたのは、周防久賀の石工であったことなど聞いており、

この地方でも幕末から久賀の石工達が仕事をしていたことを、その著書『村の崩壊・老石工のなげき』の中に書かれています。

ここ矢代で代表的な石垣は、集落を過ぎて間もなく、左手川向うに、棚田の高い石垣が見えてきます。この石垣は野面石で築かれており、古い時代の築造としては珍しく高さがあります。更によく見ると周囲とは違った、明らかに後の時代に修復されたと思われる石組みが、この石垣の中ほど左右2箇所、数メートルにわたってあります。

その部分だけには「足かけ」がつけられており、法面の石組も周囲の「野面の布積み崩し」と違い、「割石の谷積み」で、石材も新しく見えます。

このようなことから、この石垣は「足かけ」を得意とする石工により、修理されたのは間違いありません。それではなぜ「足かけ」を得意とする石工が訪れる機会があったのか。この谷筋を下った所には、山口市から萩市に至る旧萩街道があり

ます。その街道で萩に入る直前に峠があり、車両を通行させるため、明治17年に開通したトンネル工事が行われています。

それが今も残る鹿背隧道で、その案内板には、九州安心院の石工と周防大島久賀の石工に、地元の人々が加わり、工事を行ったとあります。

※鹿背トンネルは明治10年代の山口県最初の洋風石造り隧道として当時我国最長。長さ182メートル、幅4・2メートル。

例えば、この工事の際に久賀の石工が、手伝いの矢代集落の人にその仕事ぶりを見込まれ、高い棚田石垣の修復工事を請負、あわせてその技術を地元の人々に伝えたとは考えられないでしょうか。集落のいたるところに「足かけ」が見られ、数多くあることは、地域に技術が伝えられ、継承されたことに違いありません。以上、勝手な推測ですがこうしたことがあっても不思議ではないと思われます。



萩市 矢代 「足かけ」の付いた
民家石垣と水路。

明治 17 年に開通した萩街道の鹿背
トンネル 久賀の石工が工事に
関係したと案内板にあります。



萩市 矢代の棚田石垣 左右 2 箇所「足かけ」の付いた「谷積み」で修理さ
れた石垣。全体が古い時代の「布積み崩し」としては珍しく高い石垣となっ
ています（現在は耕作されていません）。

美祢市 山ヶ峠（やまがたお）

美祢市市街の南に位置する桜山の南東斜面、桜山山頂に向かう車道から分かれて直進し西に向かうと、堂下を通り山ヶ峠の集落を望む道に出ます。ここに「足かけ」のある事を教えてくれたのは、桜山にある古刹・真言宗御室派桜山南原寺の八十一世住職原田正法師です。

南原寺は桜山の頂上近く、聖徳太子の命による山口県では最も古い開山と言われ、「花の山寺南原寺」としても知られています。春には広大な境内に枝垂桜や石楠花の花が見事に咲き誇ります。また、秋には十種類以上の彼岸花や紅葉も楽しめるブロムナードなど、四季を通じて古跡巡りが出来る由緒あるお寺です。中でも、本堂に向かう照葉樹林の大木に囲まれた参道は、原田正法師自身の構想で、石仏の並んだ参道の石組みにも直接当たられ、その幅広い知見と構想力を物語っています。

す。また、広大な境内には、南原寺の隆盛を偲ばせる、巨石を組み込んだ、江戸時代の石垣も見ることが出来ます。

このように、原田正法師ご自身が石組みに関心を持たれている中で、珍しい民家の「足かけ」にも注目され、石組みに興味のある私に教えてくれたのが、ここ山本家の石垣です。

お訪ねした、平成25年、当時ご当主は故・山本末（とどむ）翁で来訪の目的を告げると快く応じていただき話を聞くことができました。山本翁の祖父に当たられる山本富太郎さんは江戸時代末期、文久3年（1863年）に周防大島・安下庄のお生まれで、石工として訪れた当地で田畑の開発に格段の働きをされ、ここに居を構えられたという事です。集落の集会所であった建物には、四国八十八か所巡礼を無事終えられた記念として寄贈された半鐘が、昭和4年春65歳・山本富太郎のご尊名入りでかけてあり、その功績を「足か

け」のある家石垣とともに伝えています。

山本家の家石垣の「足かけ」は、周防大島をルートとする石工の証として、自宅石垣に残されたことは間違いないでしょう。このように美祢市伊佐から、山陽小野田市厚狭にかけては、かなりの人数の周防大島の石工が仕事をしていたと思われるので、原田正法師にもご同行いただき、「足かけ」を探していますが、今の所、地元の農家山相家の先代が築いた於福（おふく）山中の石垣と、山本家の石垣以外、「足かけ」に出会えておりません。但し、今は杉の美林となっている山相家の石垣は、農家の築いた石垣としては高さもあり完成度も高く、そのありようから、山相家の先代が「足かけ」構築の技を持った石工から、その技術を習得した現場が、必ず存在したと考えられるので、探せば必ず見つかるものと思います。



美祢市 南原寺境内の豪快な古い石垣（江戸時代）。

山口県 周防大島町 屋代
明治時代に廃寺となった神教寺跡。南原寺七十一世報道密門大和尚の門弟により建立された墓碑を訪ね拝された折の、南原寺八十一世住職 原田正法師。





美祢市 山ヶ峠の「足かけ」のある山本家石垣。



ススキと灌木に覆われた後野集落の棚田。

岩国市錦町 大原 後野（おおばら うしろの）
 岩国市の錦川上流、宮本常一先生も歩かれた棚田集落。今は耕作者の高齢化と転出により、その殆どが荒地となっています。「足かけ」は棚田入り口付近の道下、比較的新しい石垣に見られます。

柳井市・その他

柳井市とその周辺には数多くありましたが、圃場整備と耕作放棄のため「足かけ」の多くが失われており、今回は掲載しませんでした。

* 山口県以外で「足かけ」のある棚田

兵庫県多可町 岩座神（いさりがみ）

令和2年春、以前勤めた会社の同期会で、山陰の湯村温泉に宿泊した帰路、岩座神の棚田に立ち寄ることができました。そして、遠く離れた旅先で「足かけ」を見た時には、思わず言葉にならない声が出てしまいました。

山口県東部地区の「足かけ」と、遠く離れた兵庫県岩座神の「足かけ」に何か繋がりがあるのか、又は、全く別のルーツを持つものなのか、判断できる材料を今のところ持ち合わせておりません。何かのヒントがあるとすれば、先に書いた通り、ここでは「足かけ」は「にんじゅう」と呼ばれて

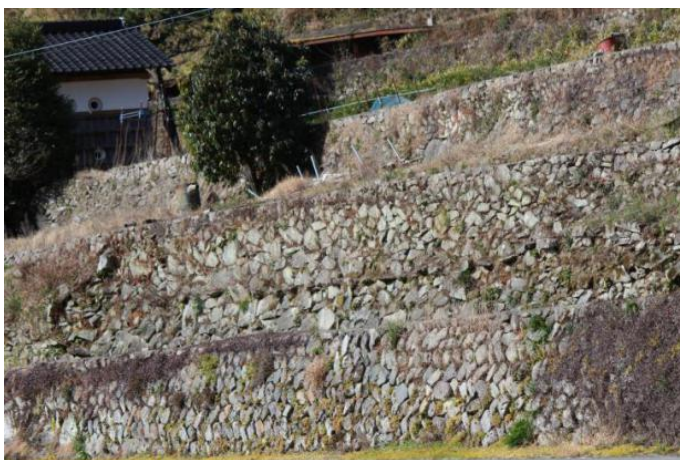
おり、他の地域とは表現の仕方に違いがあるように感じます。呼び方からすればルーツの関連性は薄いとも考えられます。ちなみに「にんじゅう」に近いと感じられる語句「にんじゅ」は『広辞苑』（岩波書店、新村出編著、昭和30年）によると「忍受 忍びこらえて受けること」となっており、その目的・機能が擬人化し、足場として人を耐えて支える構造から、勝手な憶測ですがこの地域独特の表現になったのかもしれない。呼び方とはともかく、石工は広範囲に旅をすることが多く、いずれかの地域の石工がその工法を真似て技術を持ち帰り、広まった可能性もあります。

その謎を解くカギが、「足かけ」が付いた石垣が築かれた時代の後先にあるのではないのでしょうか。この件については、機会を改めて調べて見たいと思います。

ここ岩座神で最初に目に入る「足かけ」は、先ず、集落の入り口近くから見る、川向うの棚田石垣にあります。その法面の石組から見た限り「足かけ」の付いたこの地域の石垣の中では、他より古く、「マチダオシ」による高石垣構築の際に付けられたものと思われます。そのことは、「足かけ」を境にして、掲載した写真に見られるように、「足かけ」の上側法面と下側法面で石材や積み方に違いがあるように思えるからです。上側の部分は、上に築かれていた石垣を崩して、その石材を下の段の石垣に上乘せして築かれたものらしく、野面石の「乱積み」による構築のようです。対して、下側はそれまでの古い石垣をそのまま使っているようで、割石による「布積み崩し」の工法が見て取れます。これだけで、構築の時代を推測することは到底出来ませんが、その石組みの在り様から、かなりの時を経ているものと思われます。

棚田の集落としての、岩座神の歴史は古く鎌倉

時代に開かれたと記録されています。「足かけ」は石垣の新旧に関係なく「粘り積み」の石垣にも付けられおり、地域住民の愛着を感じます。



岩座神 「足かけ」の付いた石垣。



兵庫県 岩座神

「足かけ」を挟んで石材と石組みに違いがみられ 同じ乱積みながら、下は布積み崩し、上は谷積みの要素が見られるようです。



広島県 安芸太田町
井仁の棚田風景。

広島県安芸太田町 井仁（いに）

室町時代から開かれたと言われる古い棚田集落。民俗学者神田三亀夫先生の著書にも描かれた、歴史を感じさせる美しい棚田です。「足かけ」は山際の新しい石垣に数個付けられていました。

島根県吉賀町 大井谷（おおいだに）

ここ大井谷は歴史のある集落で、三浦氏一族「平子重経（たいらごしげつね）」が鎌倉幕府より平家追討の戦に功あり、1197年地頭職に補せられ、関東より山口・仁保の荘に移住したのを祖とする」の人々が開いたとされ、多くの家が三浦性です。大井谷への来村は諸説ありますが、柿木村教育委員会報告書『大井谷の棚田』によれば1333年建武の新政による仁保の領地没収に関連した経緯によるものと考えられます。

棚田は室町時代から江戸時代にかけて開かれたと言われ、今にその歴史を伝えています。

「足かけ」は5箇所程確認出来ました、そのうち下寄りから1箇所目は、展望台正面の棚田中央部、高い石垣に9個付けられています。それは、割石と野面石の石垣で、高さ2メートル50センチ、石垣の下側半分には、一部古い石組みを残しています。それに対して「足かけ」より上側半分のは

とんどが「谷積み」要素の「乱積み」となっており、天端石と思われる石組みもあり、「足かけ」より上側部分は、江戸時代末期以降に築かれたものとも考えられます。ここ大井谷では最初に書いた、三浦氏一族平子重経の子孫、三浦高嶺氏（昭和11年生）に、お話を聞くことが出来ました（三浦の氏名は関東の地名に由来）。

ご自宅の側には三浦氏の祖先である、平子重経の江戸時代に建立された供養塔が祀られており、その来歴を物語っています。

更には、三浦高嶺氏は石工としても3代目に当たられるそうで、集落内を流れる川の護岸工事なども、ご尊父に続き改修構築に当たられたそうです。

これ以上ない方との出会いが偶然叶い、大井谷の石垣棚田の景観がより一層魅力的に感じられるようになりました。

ご尊父は石工として広島県加計の栗栖家で修

業され、芸北の石工技術の技を継ぐ名工として、石垣構築に当たられたそうです。工事に使う諸道具も自ら鍛冶で作られたそうで、その一部は今も大切に保管されています。三浦氏ご自身も手広く石垣工事に当たられ、山口県下関市豊田前には採石場を持たれ、山口県下関市から田布施町、兵庫県三田市など、奥様を伴われ、広範囲に仕事をされたそうです。

興味深い話は数々ありますが、中央部の「足かけ」は三浦氏が子供の頃の記憶にあるとのことでした。また、ここ大井谷では、マチダオシは昔から余りされていないだろうとの話。何故かというところには隠れた巨岩がいたるところにあり、その巨岩を取り込むように柵田が設計されており、マチダオシをすれば別の巨岩が顔を出して邪魔になり、田圃にならないからとのことでした。

特に中央部の「足かけ」のある柵田は尾根筋に当たり、巨岩がいたるところにあり、マチダオシ

には不向きな柵田であるとのことでした。従って柵田は古い形を残しており、全体的に高い石垣は少なく、開拓当初に設計された畦畔に近い形で残されているようです。



石と親しく接し、合わせて畏敬の念を物語っています。



大井谷 草に覆われた高石垣の「足かけ」(最も高い)。



島根県吉賀町 大井谷 中央部「足かけ」の付いた石



三浦高嶺氏

三浦氏の祖、平子重経の供養塔。
(江戸時代)





島根県 大井谷 棚田の
畦畔も大岩と相談の上
それを活かして決定。

話がそれますが、ここ大井谷の棚田集落を訪ねて感じることは、その昔、人々は、刀を玄翁に持ち替えて、日々石との闘いであつたろうと思われます。石を割り、そして運び、積み重ねて、石という手強い敵を石垣という味方にしました。そのような棚田に稲を育て生活を支えてきた先人たちの労苦はいかばかりだったでしょう。

その痕跡は展望台駐車場のすぐ上、巨岩の並ぶ荒地地を見れば容易に想像出来ます。そして長年の汗の結晶である稲田を守るため、次の写真に見られるように、石垣の草抜き作業は続けられて来ました。

このような情景を見て思うことは、ここで作られた米も、広大な平野の農地で作られた米も、似たような価格で取引されている現状です。このような条件下のように考えても、石垣棚田の米作りを続けていけるとは思えません。何とか石垣棚田の米づくりを未来に残すために、例えば「石垣



大井谷 田植え前、畦畔の草取りと、畔の土手づくり作業。

棚田耕作後継者支援金」というような制度を設け、耕作している石垣棚田の畦畔の面積に応じて、一定の金額を毎年支給するといった支援を、大井谷の棚田をモデルとして、早急に実行できないものか検討して欲しいものです。

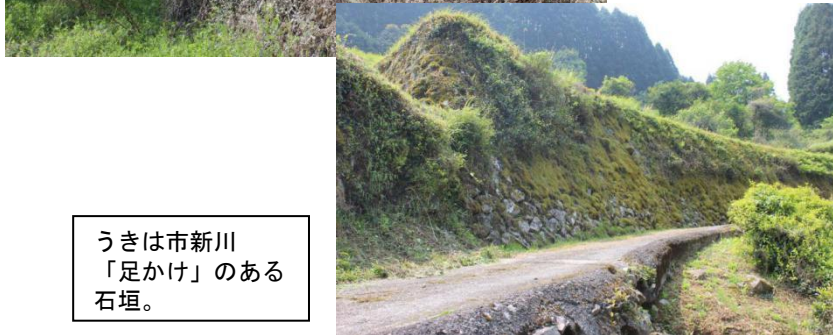
福岡県 うきは市 新川・姫治・葛籠（にいかわ・ひめはる・つづら）

彼岸花で有名な全国棚田百選葛籠（つづら）棚田に向かう途中、県道106号線を姫治郵便局手前で右折、合所ダム上流の橋を渡ります。道に沿って集落を抜けると、間もなく左手に石垣の棚田が見えてきます。最初はここに「足かけ」のあることに気付かず、家に帰って写真を見て再度訪ね、草を除き「足掛け」のある事を確認しました。石垣は、野面石と割石の谷積みで、法面の勾配の反りの持たせ方から、明らかに腕利きの石工が関わったもののように思えます。

更に、新川沿いにもう一ヶ所、県道106号線をさらに東に進み、旧姫治小学校入り口手前の南向き斜面の畑石垣に「足かけ」があります。こちらでも野面石と割石による谷積みで、石組みの様子から寺勾配の工法を習得した腕利きの石工によるものと思われます。



うきは市新川姫治 「足かけ」
のある畑石垣。法面の反り（波
返し?）が印象的。



うきは市新川
「足かけ」のある
石垣。

ここ、うきは市の周辺地域には、棚田はもとより色々な組み方の石積みが見られます。

なかでも見事なのは、うきは市の古刹清水寺の野面石（玉石）による布積みの正面石垣と、安政年間（1854～1859年）に築かれたと言われる、新川地区分田の旧家・野上家の河岸の家石垣です。また、ここ野上家では家裏の山側擁壁に「足かけ」が付けられています。

特に野上家の石垣は、久留米の城石垣を手掛けた石工も関係した構築と言われ、野面で角のない布積みの石組みは、この地方独特の石垣の景観を見せています。

これらの石積みは、時代を超えた石工達の腕自慢の競技会を見るようで興味は尽きません。特に筑後川流域各地の特色である、丸みを帯びた野面石を使った「玉石積み」の石垣は、独特の築造技術の高さを物語っています。そして、この石組みは日田市の月隈城天守跡の石垣にも共通してい

ます。そんな周囲の石積みの中で、前ページ掲載の「足かけ」のある割石積みの石垣は、特に異彩を放っています。

ただ残念ながら、周防大島の石工が活躍したと言われる北九州全体でも、「足かけ」は今の所ここで見つけることができていません。

このような状況で、うきは市新川地区の「足かけ」はどのような道筋を辿って来たものか、今の所判りません、これから引き続き課題としていきたいと思えます。



うきは市 臨済宗妙心寺派清水寺
明治初年大改修が行われており、
石垣もその時構築されたものと思われ
ます（全国名水百選）。



うきは市の
清水寺の布積
見事な石垣
積み（玉石
積み）

ただ「足かけ」のある石垣について、未確認の情報ながら、うきは市によると、うきは市にはかつて山北石工という石工集団が存在し、それは久留米藩が治水工事のため山口県から呼び寄せ、苗字帯刀を許された人達であったとのこと。上部に反りを持たせた見事な石垣を見てみると、つい想像逞しくなります（調査継続中）。

このように見てくると、石垣の建設には、石工の育った地域独特のノウハウがあり、「足かけ」もその象徴的な役割を果たしていたのではないのでしょうか。

なお、葛籠棚田で特筆すべきことは、石垣法面の石組で、四百年前に築かれたとされていますが、多くの石垣が野面石の「布積み」で、「乱積み」や「谷積み」で築かれた他の地域の棚田石垣とは一線を画しています。これらの棚田石垣の工法に合わせて、この地方を代表する有馬藩の山守・野上家の石垣が、「布積み」で見事に築かれていること

も領けます。そして、「足かけ」が、ここ野上家では山側作業小屋裏擁壁の「布積み」石垣に「足かけ」が2段につけられており、このような石組みの例は、他で見たことはありません。



（上）うきは市山林地主 野上家の河岸家石垣。見事な布積みによる石組、独特の勾配が持たせてあります。

（下）家屋裏物置小屋の擁壁も「布積み」で、そこには2段になった「足かけ」が付けられています。

六 石工の旅

1 出稼ぎ石工の誕生

『山口県久賀町誌』（久賀町誌編集委員会、昭和29年3月）のなかに次のような記述があります。

「享保（1716～1735年）の頃から人口の著しい増加を見せ始めたのは島内一般の現象であつた。しかもそれはサツマイモの伝来による食料の増加と、木綿織を中心にした女子の家内工業の発達が、大きく原因したもののように思われる。」

特に島の東部の人口増加の著しいのは、明らかにサツマイモの伝来（享保末年 1735年頃）によって畑作の生産高が著しく高まつてきたことが原因すると考えられる。

そしてそれらによって急増してきた労力が家内工業を呼び起こしてくるのである。今久賀町の人口増加のあとを辿ってみると次のようになっている。



周防大島町久賀 庄地の石垣 上の段は古い石垣と思われ、石組みも野面石の乱積みとなっている。

(抜粋)	
元文2年	(1737年)
寛政3年	(1791年)
天保13年	(1842年)
明治14年	(1881年)
8365人	
6995人	
6190人	
2151人	

— 中略 —

即ち元文から寛政までの五十年余りの間に約三倍となつている。

このような状況下、天保年間に入ると出稼ぎの内訳は次のようになる。

総数 752人の内 塩浜・石築・石舟乗・奉公人として420人が島の外に出ている。

— 中略 —

この地の石垣積みはいつ頃から盛んになったか明らかでないが、文政九年（1826年）に起工した古波戸（通称・古港）の工事は大崎（半島傾斜地の集落）の人が請負うておるから、当時このような技術はすでにこの地に行われていたものと思われる。

（平成の台風による損壊前の古波戸は、印南先生の写真によると「谷積み」となっている。）

もと石垣は大きな石の間に小さい石をはさみつつ積み上げていくのが普通であったから、波などには極めて弱く、従つて波止の築造は殆ど見ら

れず屋敷や田の岸（ギシ）を石積みする程度のものであった。それをほぼ一定した大きさの石を斜めにからませ乍ら積み上げていくいわゆる「亀の甲積み」（通称は「谷積み」・「矢筈積み」・「亀の甲積み」は久賀独特の呼び方と言われている）は入浜製塩の盛んになった頃から潮溜めの石垣を中心に盛んに行われるようになったらしい。入浜塩田の盛んになった元禄（1688年～1703年）の頃からこの技術は島民の身につけてきたものと思われる。

今日久賀の石工の築いたという石垣や波止は山口県の長門地方の海岸から豊前、筑前、肥前の海岸各地に残っているが、全くその手法が一致し、波に強く又しぶきの上がるのを少なくするのを特色とする。これは石垣に独自の反りをつけるためで、この技術は久賀人の最も得意とするところであった。

最初、久賀の人たちは塩浜の潮留石垣やその他

海岸地方の工事に多く働いていたが、天保の頃から藩の政策として、畠田成が取り上げられるに至って防長の山間へも入り込むようになったもので、山間への出稼ぎはやや遅れる」(『久賀町誌』「第三章社会的発展 第四節住民の離町 石工」より抜粋)。

このように記述されており、石工を輩出する時代の流れと環境が要約されています。それは、第一にサツマイモの植え付けによる食生活の確保と、それによる人口増が労働力を飛躍的に増加させ、その余った労働力が山地を畑に変えて食生活を支え、さらに労働人口を生み出し、女は機織りに励み、男は石工などの職人として、技術を持つて旅立っていく。その背景が分かりやすく、明快に述べられています。



周防大島町久賀 古波止そばの海岸護岸。



久賀の古波止 正面突堤
通称古港。

久賀 大崎集落 半島の傾斜地にある。

現実には、食糧供給面でのサツマイモの植え付けは「耕して天に至る」の言葉通り、島の人達は働きの本領を発揮し、山の頂上近くまで開墾し尽くすほどでした。

それは、私が小学生のころ（昭和30年代）久賀の東部・東郷山にあった、自家所有のミカン園最上段のサツマイモ畑は、山の上部よりせり出した尾根にあり、独立した小山の頂きを畑にしたものでした。畑全体がドーム型で、中央が高くなり、花崗岩の巨石が、山頂の名残として二つ並んで露出していました。何故かその景色は子供心に面白く思え、夢物語りの主人公になって、よくその岩に登って遊んだものでした。

話がそれましたが、この様な水源のない山頂の畑でもタフに育つサツマイモは、島民の食生活を支える、画期的な作物であったことに間違いありません。

こうした背景で増加した労働力は、島の東部で

は腕の良い長州大工として、四国をはじめ各地で社殿や寺院の建築に携わり、島の中西部久賀などでは、石工として本土や九州にでかけました。もともと久賀地域では傾斜面が多かったため石垣棚田造成の技術が早くから培われ、あわせて島内の小松地区には入浜塩田も開かれたため、その潮留め工事にも関連して、優れた技術を持った石工が育っていた可能性があります。



周防大島町 久賀中心部全景 今は竹藪と灌木に覆われた周囲の山も、昭和時代まで段畠や棚田で頂上近くまで耕作されていた。

2 周防大島町久賀の石垣棚田開発記録『西山に陽は昇らず』

稲田の開発には次のような記録も残されています（『周防大島奇談あれこれ 石原田騒動』、石田幸助編著、昭和61年6月より抜粋）。

「江戸時代の初め頃幕府の命令による事業で藩の財政は窮迫し、萩藩主二代目綱広の時、苦肉の策として万治制法三十三ヶ条（1658～1659年）を定め藩財政の立て直しを図り、その中で山野荒地干潟を一般に開放して開拓を奨励したのである。

久賀『野登呂』の大窪に戸数十戸余りの集落があつて、その下方に人も寄り付かない石原に、竹、かずら、雑木が生い茂り、大蛇と狸の生息すると言われた有史以来、手付かずの荒地が広範囲にあった。これは太古山に向かつて左側の山が崩れ落ちて出来た残骸である。人の見捨てた荒地を開拓すれば人の笑いものになると言う観念から、（開

拓者本人が）良能の師（藩の現地偵察役の密偵か）を訪ねて相談すると、師は大いに喜び、万治制法も四十年余りも経ているけれど開拓は藩の方針だからと、詳細に指示を授け開拓事業の援助をすると、確約した。

仁左衛門（地名）の住人である竜右衛門、その子十兵衛、父の竜兵衛共々人の笑うのも意に介せず良能ノ師の教え通り書を携えて、開拓の塩田（1688年拝領築造開始）開拓者栗谷帯刀（元家老）の寓居を訪ねた。久賀の石山が崩れた残骸を開拓すると言う、大計画を書類で見て（栗屋は）感嘆したが、早速藩に報告し、許可を得て、元禄十年（1697年）五月開拓着行の運びとなった。

（中略）

この無謀とも思える計画は「西山に陽は昇らず」と人々に揶揄されながら、十年余りの歳月をかけ、宝永四年（1707年）には、石原は美田に更生し、八人の耕作者が分担し百姓となった。〔略〕こ

のことについて藩主は殊の外満悦で、開拓の功を嘉し、十兵衛は石原田の姓を賜り帯刀を許された」。

この話に出てくる石原田は、現在久賀畑集落の東隣の窪に石原田上・石原田、そして、大規模農道を挟んで石原田下の3箇所地名で、一部荒地になりながらも果樹畑としてその姿を残しています。

（著者の石田幸助は十兵衛の子孫国蔵の6男で明治42年生。法事などで親戚から口伝えに伝わった話を昭和61年に本人が書き残したもの。）



周防大島町久賀 石原田より右手東郷山と奥に瀬戸内海を望む。

3 石工の活躍

今回、前記、石原田の高石垣全体に「足かけ」が連続して並び付けられていれば、1700年には既に「足かけ」が構築されていたことが証明されると期待しましたが、「足かけ」が付いたところと無いところがあり、付けられた所は、後の時代に修復された可能性もあり、そのことを証明するには至りませんでした。これから「足かけ」と石組みの組合せの詳しい調査が必要と思われます。

いずれにしてもこのように、他では見向きもされないような斜面が、石垣により稲田として開拓されていきました。そして、この話は柵田・石原田十兵衛と塩田・栗屋帯刀の不思議な結びつきによる、産業振興の歴史を如実に物語る話ではないでしょうか。

島の石工による柵田石垣の構築は、万治制法（1658～1660年）から始まり、毛利藩の「天保の大改革・四白政策」により、「畠田成」が

指導された江戸末期に引き継がれ、明治から昭和にかけて、更に盛んに行われたと思われます。

このような環境で技を育て培った石工の出稼ぎは、明治・大正・昭和と受け継がれ、私の父なども若いころ農閑期には組に入れてもらい、山口県の厚狭方面の山間部に出掛け、石垣構築に当たったようです。子供の頃、父から聞いた話では、そこは余程の山深い所であつたらしく、夜になるとキツネがいたずらをする話など聞いたものです。



周防大島町
久賀 石原田の水道
「足かけ」とともに棚田構
築の工夫である。



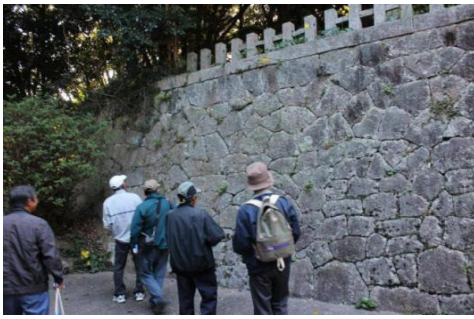
久賀 石原田 「足かけ」の付いた石垣。

4 石工の得意技

「谷積み」工法は各地の工事現場で進化したと思われ、元禄年間に盛んになった入浜塩田の潮留め石垣や、波に強い特性を活かした海岸の波止場工事などで盛んに構築されるようになりました。石材も野面石の谷積みから切石の谷積みへと変化して、幕末には、城石垣として構築されています。

この様な流れの中で、早くからこの技術に習熟していたのが、周防大島の石工達で、塩田の潮留め石垣でその技術を習得し、それを港の波戸（波止）の築造に用いて、波に強くしぶきの上りが少ない反りを付けた技を加え、やがて棚田石垣にその技術を活かして、反りのある高石垣を築いていきました。

このように築かれた場所の後先は入れ替わるかもしれませんが、いずれかの現場で最初に組まれた「谷積み」が、石工達によって改良され、その用途を広げ、石工の旅とともに、伝えられたこ



周防大島町久賀 八幡八幡宮 寛政時代の石垣 石工山近某の作と言われ、扇形をした切石なども組み込まれ遊び心がかがえる。

とでしよう。そして「谷積み」は今でも海の突堤などにしばしば見られます。また、このような特技を持って他の地域に出掛け、持ち分を活かして生き抜く習性が、「世間師」（しよけんし）と呼ばれる人々を誕生させ、それがハワイをはじめ世界に旅立ち活躍する、フロンティア精神にあふれた人達を育てた、原動力の一つになったことは間違いないかもしれません。

5 高石垣の背景と石工の役割

先ず、人の背丈より高い石垣を棚田で積み始めたのは、城石垣で石組みの技術を発達させ、その技術を伝えた江戸時代の石工達ではないでしょうか。

それは、古く室町時代から開かれ、最初は素人が築いたと思われる島根県大井谷の棚田石垣は、殆どが人の手が届く高さで築かれていることから想像出来ます。

そして、他の地域でも高い石垣はその多くが、石工が関係したものと思われまます。

続いて、どのような経緯で、人の手が届かない「足かけ」の必要な高い石垣が、築かれることになったのか、その背景を考えてみます。

それには先ず、周りに平地が少なく、代わりに、高い石垣を築かなければ稲田にならない傾斜地があり、そこに高い石垣を築く人と技が揃った場合です。

そして、開発した稲田からの収入を期待する経済的な事情や、開拓経費に対する見返りがなければなりません。このような背景が生んだのが、開拓地に対する税の優遇や、免税のための「隠し田」と呼ばれる秘密裏の稲田開拓です。

この他にも作業の効率化のためのマチダオシによる高石垣の構築など様々なケースがあると思いますが、普段何気なしに見ている棚田の石垣は、数多くの困難な条件を克服した人々の、尽力を物語る貴重な遺産です。

このように、先人達の知恵と汗の賜物である、棚田石垣が荒廃していく現状を放置し、失ってしまう社会は、何を未来に伝えて行くのでしょうか。封建制の時代でも優遇策が適用されて、棚田は開拓されました。その歴史を物語る棚田石垣を、今こそ守り伝える知恵と施策が、必要な時ではないでしょうか。



周防大島町 久賀庄地 野面石
で「谷積み」様式で積まれた「足
かけ」のある高石垣。

6 石組みの独自工法

先に述べた通り、知恵と技の結晶である、高石垣の欠点を克服するため考案されたのが「足かけ」です。

しかし現実には、佐賀県蔵野（わらびの）をはじめ各地の高石垣には「足かけ」が付けられていません。それは何故か蔵野のように野面石の「乱積み」で築かれた石垣には、足をかけるための隙間がすでにあるからです。

「野面積み」と、「切石積み・間知石積み」石垣の違いは、合端が法面の奥まった所になるのが「野面積み」で、合端が法面の表面になるのが「切石積み」と「間知石積み」です。そして、「割石積み」の場合はそのいずれにもなりません。

「足かけ」のある石垣に話を戻しましょう。それは法面に隙間の少ない棚田石垣では足場がなく、高い所の草取りなどの作業ができにくいのです。それを克服するため考案されたのが「足かけ」の

付いた石垣です。しかしながら「足かけ」そのものはいつ頃どこで構築されるようになったのか、その答えは明確ではありません。

そこで、昔から耕地が少なく地形上、山の急斜面に棚田を築かざるを得なかった、山口県周防大島には、その諸条件が揃っていたと考えます。このことは、スイドウ（暗渠）についても同様です。何れも斜面の多い島の、必要に迫られた発明ではないでしょうか。又、他では余り見られない野面石で築かれた古い石垣に「足かけ」が付けられている例が多くあることから想像できます。

以上のことなど含めて、「足かけ」発祥の地は、山口県の周防大島と想定することができるのはないでしょうか。そのことを証明するためにも、今後、開拓年代の明らかな「足かけ」のある棚田、石原田の調査を行い、より確実な情報を得ることが必要と思われます。

周防大島町久賀 東郷山
「足かけ」は石垣の高さに
関係なく上辺部から一定
の所に付けられている。



7 石工が伝え残したもの

石垣は石工の技を見せる競技会場ともいえるでしょう。「足かけ」の付いた棚田石垣の下から高い法面を見上げると、迫ってくるような力強さを感じることがあります。この迫力は海の波止場の波返しで鍛えられた、反りの技からくるものではないでしょうか。このように多様な石組みを見せる石垣には、それぞれに石の配置や加工度合などに独特の持ち味があります。その中に、作られた時代背景や、暮らしを読み取ることもできます。棚田石垣はそれらを知ることの出来る、貴重な証です。何とかして、その一部だけでも未来に守り残す努力が必要なのではないでしょうか。

例えば、ふるさと納税による支援がどれだけの成果を得ているか。又、棚田石垣を守る農家に対して、石垣法面の面積に応じた、長期的な支援の制度は出来ないかなど、あらゆる手立てを考え検討してほしいものです。



周防大島町 久賀庄地地区 溜池と久賀湾の
前島を望む。

8 「石原田騒動」その後

石原田十兵衛は石原田の名主となり、廻船業にも進出し、藩の塩の関西への運搬にも携わりましたが、思うような成果を得ず、千石船と御用権利を小松の人に譲り渡して廃業しました。

そして、享保3年（1718年）天候不順による凶作のため、大飢饉になったことが原因で、一揆が起り皆で久賀の勘場（代官所）を襲うという事態になりました。その暴挙を止めるため、十兵衛が代表として窮状を訴え、免税することに合わせて、代官の不正を防ぐことを藩主に直訴すること、皆は焼き討ちを思いとどまりました。

こうして、極刑を覚悟して直訴を行った十兵衛は捕らえられ、萩の見島に流罪となりましたが、石原田開拓の功績と、直訴の際の態度が優れていたことが勘案され、服役半年にして流罪を許され帰郷しました。この事に、粟屋帯刀の進言があったことは間違いありません。こうして、石原田十

兵衛の伝記は代々命日の供養として語り継がれ、久賀の洞松寺にある十兵衛の墓碑には、明和5年（1768年）没齡84歳とあります。

扱ってここまで、「足かけ」のルーツを探して各地の棚田石垣を訪ねて来ましたが、結局確証がなく何も明確にならないままです。ただ漠然としながらも周防大島に重要な鍵があるように感じます。

課題とその解決策

Q 「谷積み」が最初に築かれた場所と時代。

A 書籍『石垣普請』によれば元和年間（1615～）には、間知石と共に存在したとあります。築かれた場所はこれからの課題です。なお、『久賀町誌』には「入浜製塩の盛んになった頃から潮留の石垣を中心にして盛んに行われるようになってらしい」とあります。

Q 「足かけ」発祥の地域と年代。

A 周防大島久賀の石原田が開拓された1700年前後の江戸時代の周防大島と思われます。石原田では野面石で築かれた「布積み崩し」の石垣に「足かけ」が付けられており、近隣にある能庄スイドウと同じく、農民達の工夫から生みだされた可能性が高いものと思われます。

Q 次ページ写真の周防大島久賀畑地区の二つのスイドウ、どちらが古い形か。

A スイドウ樋門の石組みに注目してみると、上段の能庄のスイドウは周辺が谷積みの法面で、樋門全体が丸みを帯びるように工夫されており、近い時代に修復・構築されたと思われます（アーチ式に影響を受けたか）。対して、下の段の石原田の樋門（蛇口？）は祠型で作られており、石原田開拓の言い伝えから江戸時代中期で、形としても古いものと思われます。

あとがき

気の向くまま始めた石垣を訪ねる旅。いつの間にか月日が過ぎ、取材時の様子と、冊子作成時の現状にかなりの違いを生じてしまいました。その点、お許し頂くとともに、あらためてその変容に驚き、記録していくことの大切さを感じています。

又、あらためて、各地に個性豊かな石垣をみながら、感じたことは、その構築に携わった人々にとって、「石垣の構築は厳しい労働の反面、感性を活かせる、楽しい仕事」であったのではないかという事です。それは石組みの中に、先人たちの工夫の跡が垣間見え、それぞれに持ち味があるからです。そのことはこれからの時代、働くことの中に、生きがいを求める人々にとって、一つの道標にもなるのではないのでしょうか。

最後に、日頃見過ごされてしまうことの多い石垣。この一冊が、例え一人でも、身近な石組みに、目を留めてくれるきっかけになれば幸いです。

※お断り 近年、棚田の耕作放棄が急速に進み、掲載した写真と、現状の景観に差違を生じている場合があります。お含みの上ご覧ください。



周防大島町 畑 能庄



企画展「宮本常一関係資料を紐解く」 顛末

板 垣 優 河

(宮本常一記念館学芸員)

本稿は、宮本常一記念館の収蔵資料の紹介を兼ねて、令和5年3月25日から5月14日にかけて同館で開催した企画展「宮本常一関係資料を紐解く」の顛末を記すものである。

一 企画展の趣旨

周防大島町平野に所在する宮本常一記念館では、本町出身の民俗学者宮本常一ゆかりの文書約6千点、蔵書約2万冊、書簡約8千点、写真約10万枚を保管している。このうち文書414点が、令和4年3月4日に「宮本常一関係資料」として山口県有形文化財（歴史資料）に指定された。

宮本は、「あるく・みる・きく」という現場主

義的な態度を生涯貫いた民俗学者であった。彼は日本列島を隅々まで歩き、多くのモノを見、様々なコトを聞き、地域の実情を把握していった。戦前から戦後、そして高度経済成長期を経てわが国の生活環境が大きく変容するなかで、山野河海での様々な営みをこれほどまで丹念に記録した人物はほかにいない。彼によって作成された諸資料は、生きた民衆の知恵や技術をいまに伝える至上の民俗伝承記録ということができる。

特に今回の指定資料の中核は、宮本が日本各地の民俗調査に臨んで作成した聞書きやスケッチ、古文書類を筆写したノート、メモなどの調査資料である。その作成範囲は、北は北海道の礼文島から南は鹿児島県の屋久島にまで及び、わが国の農山漁村の生活や文化を理解するうえで欠くことのできないものばかりである。

そこで企画展では、今回の指定資料を窓口にして、宮本の調査姿勢や着眼点、また日本の各地で

近過去まで営まれていた暮らしを幅広く紹介することを目指した。これにより、来館者に宮本の民俗学者としての魅力と、日本文化の奥行きの高さをともに感じとってもらおうと考えた。

二 企画展の準備

筆者は令和4年4月に周防大島町の職員に採用され、これまで宮本常一記念館で勤務している。生まれも育ちも京都で、大学では縄文時代の考古学を研究し、学芸員（またそれ以前に公務員）としての実務経験を持たなかった筆者にとっては、右も左も分からない状態での出発だった。まずは所蔵資料に一つでも多くふれ、その内容を把握していく必要があった。折しも「宮本常一関係資料」が県指定を受けたばかりで、町内でも宮本常一への関心が改めて高まっているように見受けられた。そこで、令和4年度に開催する企画展のテーマ設定には、ほとんど迷う余地がなかった。

事務仕事にも少しだけ慣れてきた同年7月頃からは、時間を見つけて県指定資料414点の一つ一つに目を通していった。それまで、刊行された著作でしか宮本の調査内容を知らなかった筆者にとって、そのもともになった直筆の調査記録との対話は、誠に心躍るものだった。この感覚を、来館者にも是非味わってもらいたいと考えた。

資料整理は9月上旬に概ね完了する。この間、『広報すおう大島』2022年9月号で「周防大島の文化財50 宮本常一関係資料」として、県指定資料のあらましを紹介した。また、整理の過程で、かねてからの筆者の研究課題（縄文時代植物採集活動の研究）にとっても重要度の高い記録が散見することが判明し、これについては別途分析を進め、その結果を「宮本常一関係資料からみた近代山村の植物採集活動」と題して本誌6号に発表した。この稿では、宮本の調査記録と筆者による調査記録を対照させながら、青森県下北地方や

秋田県檜木内村、長野県奈川村、奈良県吉野西奥地方などにおける堅果類・根茎類の採集活動を検討した。今回の企画展では、その成果を随所に反映させている。これにより、自身の体験と実感、そして熱意をもって資料の意義を説明できるようになった。

年が改まり、令和5年1月からは解説パネルのレイアウトを固めていった。先述のように、今回の企画展では、宮本による民俗調査の特質を浮き彫りにするとともに、日本各地で営まれていた生活文化の多様性を示すことを狙いとしている。そこで、解説パネルでは宮本が作成した調査資料を来館者が実際に判読・読解できるかたちで示し、併せて宮本や筆者が現地で撮影した写真も数多く載せ、来館者が調査地域についてイメージを持つことができるように努めた。

1月23日には県内の報道機関に企画展のプレスリリースを行い、町内に向けては周防大島町社

会教育施設連携協議会の広報「あそぶ・学ぶ・語る」2023年2月号、『広報すおう大島』2023年3月号の上で告知した。またチラシ(図1)を500部印刷し、2月下旬に関係各所へ配布した。3月13日にはパネル原稿を出力し、A0判パネルに12枚として仕上げた。

企画展開催の前日、3月24日の夜に当館職員の徳毛敦洋氏と相談しながら会場の設営を行った。当館には企画展用の特別スペースがないため、常設展示の一部と入れ替えるかたちで設営する。展

山口県文化財指定記念企画展

宮本常一関係資料を紐解く



宮本常一(1898-1980)は、山口県大島郡大島町(現大島町)に生まれ、大島町立大島中学校(現大島町立大島中学校)を卒業。その後、東京府立第一高等学校(現東京都立第一高等学校)を卒業。大島町に帰郷後、大島町立大島中学校(現大島町立大島中学校)の教員を務めた。大島町に没後、大島町立大島中学校(現大島町立大島中学校)に宮本常一記念館が設置された。

期間 令和5年3月25日(土)～5月14日(日)
※水曜日は休館日を除く
※3月25日(土)、4月30日(日)、5月13日(日)はギャラリートークを行います。各日11時開館です。

入館料 大人 300円 / 子供 150円 ※大島町内の小中学生は無料

周防大島文化交流センター(宮本常一記念館)
〒742-2512 山口県大島郡周防大島町平野417-11
TEL/FAX 0820-78-2514
MAIL koryu@town.suo-ohshima.lg.jp

図1 企画展のチラシ

表 1 展示資料一覧

指定	区分	表題	年代
5	調査資料	32 沼島1	1941
9	調査資料	14 南九州見聞記（二） 屋久島（2） 下屋久村、統計、栗生、安房	1940
13	調査資料	農村調査 秋田県由利郡矢島町 秋田県仙北郡角館町	1946
16	調査資料	[福島県石城郡草野村北神谷 高木誠一氏聞書]	1946
33	調査資料	6 吉野西奥探訪記（六） 湯泉地、上葛川、玉置川	1939
34	調査資料	1 農漁村探訪録1（漁業資料1） 大阪府泉南郡多奈川町小島 大阪府泉南郡深日町 大阪府泉南郡西島取村波有手 大阪府泉南郡尾崎町 大阪府泉佐野市 広島県草津町 広島県佐伯郡大野村片浜 広島県佐伯郡玖波町	1949
38	調査資料	18 淡路岩屋町、淡路假屋町（淡路1）	1950
74	調査資料	26 平群島伝承	1951
109	調査資料	[和田村調査メモ]	1949
112	調査資料	[小積ほか調査メモ]	1965
116	調査資料	[伊保田調査メモ]	1965
130	調査資料	円城村4 農地解放、住民	1953
151	調査資料	佐渡調査 南片辺、小田、真更川、内海府、大久保、金田、沢崎、宿根木、岩首、豊国、柿ノ浦、赤玉、慶宮寺、羽茂、大浦、久知河内、岩首、赤泊、下川茂、大崎、北田野浦	1959-1960
167	調査資料	甘藷栽培 熊本県上益城郡甲佐町 丸木長雄	1946
174	調査資料	対馬古文書集8 諸家	1951
191	調査資料	40 対馬調査3 豆殿村浅藻	1950
192	調査資料	[浅藻地区]	1950
238	調査資料	見島調査	1960
255	調査資料	名倉聞書2	1956
267	調査資料	北海道離島 利尻、礼文、焼尻、天売	1964
301	調査資料	9 中国3 鱒湖	1939
303	調査資料	10 中国4 田所、大朝、八幡、樽床	1939
305	調査資料	11 中国5 樽床、横川、三葛、高根	1939
307	調査資料	12 中国6 高根村聞書	1939
308	調査資料	[石徹白調査カード]	1937
313	調査資料	車窓見聞録	1948
330	調査資料	昭和33年 情島漁業資料	1958
344	調査資料	瀬戸内海 瀬戸内海（中国新聞抜粋） 阿多田島 美星町 白石島 北木島 真鍋島 真島 瀬戸内海研究目次 百島	1961-1963
346	調査資料	奈川村資料	1965
356	調査資料	71 五島調査6 有川町 宇久島1	1952
366	調査資料	77 五島調査12 青方村2 浜ノ浦村 日ノ島村	1952
389	調査参考資料	対馬集落分布	1950
391	調査参考資料	山口県萩市見島全図	1960-1962
401	原稿	[日本の中央と地方 原稿]	1967以前
406	原稿	[私の日本地図3下北半島原稿]	1967以前
407	その他	歌集 我が行く道	1930-1931
411	その他	樹蔭	1925以前

示空間のレイアウトは、概ね平面長方形である。

その一方の長辺（壁面）には山口県教育委員会から交付された指定書と解説パネル12枚を横並びに展示した。もう一方の長辺には長さ180センチ、2段の展示ケースを4つ並

べ、県指定資料414点のうち

特徴的な資料37点を展示した

（表1）。併せて、宮本による

フィールドワーク、調査記録の

整理、原稿執筆といった一連の

流れをイメージできるよう、彼

が生前使用していたカバンやカ

メラ、机、椅子、そのほか代表

的な刊行物なども展示した。

三 県指定資料の概要

山口県有形文化財「宮本常一

関係資料」414点の構成は次

のとおりである。

調査資料（381点）

聞書きや古文書類の筆

写、メモなど、宮本自身の手による民俗調査の記

録。A5判ノートをはじめ、藁半紙や原稿用紙の

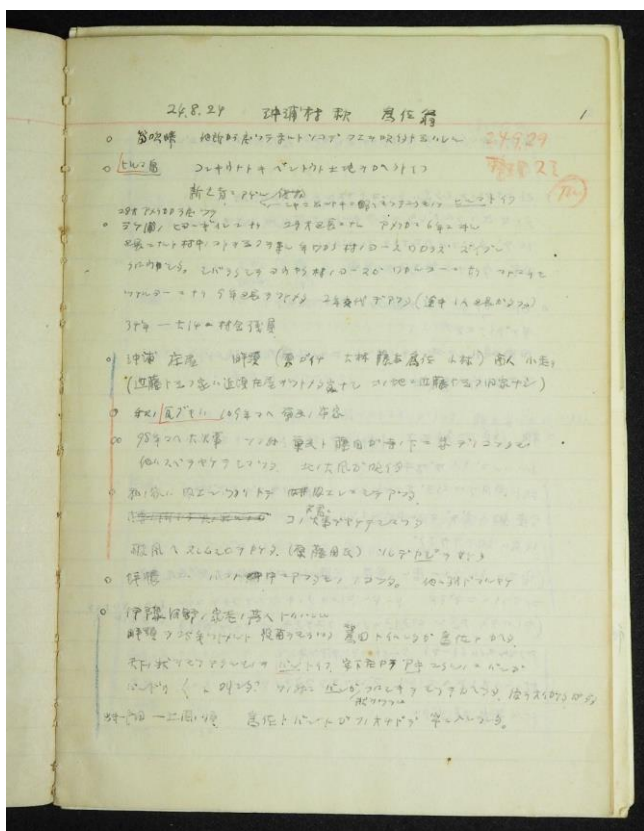


図2 周防大島調査ノート

裏紙を仮綴じしたもの、調査カードなど様々な形態がある。代表的なものとしては、離島での漁業制度や漁具・漁法などを記録した北海道札文島・利尻島、山口県見島、長崎県対馬・五島、鹿児島県屋久島の調査資料、山村の生活文化を記録した秋田県檜木内村、越前石徹白、吉野西奥地方の調査資料、アチック・ミューゼウムに入って最初に旅した中国地方の調査資料、そして宮本の郷里である周防大島の調査資料などがある(図2)。

調査参考資料(15点) 調査の過程で入手した地図や文献等の印刷物に、宮本が独自に書き込んだもの。例えば山口県見島では、浦々で捕獲できる魚種をメモした見島全図、集落の様子をきめ細やかにメモした簡易水道配水管布設状況図などを残している。これら資料からは、宮本が調査に際して地図を携行し、そこで見たり聞いたたりしたことを直接メモする習慣があつたことがうかがえる。

原稿(10点) 調査の成果を公表するために、

宮本が原稿用紙に書き起こしたもの。『日本の中央と地方』(宮本常一著作集第2巻)、『私の日本地図3・下北半島』などの原稿がある。

その他(8点) 宮本が10代から20代にかけて編んだ歌集や詩集など。例えば、昭和5・6年に編んだ『歌集 我が行く道』には、「帰郷」として「名なさずば 再び見じと誓ひたる 故里の土病みて踏みたり」という歌が見える。宮本は大坂府の田尻尋常小学校で教員をしていた昭和5年1月に肋膜炎を患い、同年3月に周防大島に帰郷、2年間の療養生活を送った。この歌からは、青年時代の宮本の向上心の強さとその一時的な挫折をうかがうことができる。宮本の内面をみるうえで、興味深い資料といえる。

さて宮本が本格的に民俗調査で歩くようになるのは、昭和14年11月以降だが、自身の民俗調査について、彼は『日本の中央と地方』の冒頭で次のように述べている(原稿より)。「私は過去二五

あり、それがために、「有形文化財（歴史資料）」という区分で今回指定を受けたものと推測できる。

四 企画展の成果と課題

会期中の3月25日、4月30日、5月14日には、筆者によるギャラリートークをそれぞれ1時間ほどかけて行った。参加者は宮本の著作を読んだことがある人がほとんどで、特に『忘れられた日本人』のもとになった長崎県対馬での聞き書きなどは注目度が高かった。町内を中心に県内や広島県からの参加者が多かったが、「日本各地でこんなにも様々な営みがあったのか」と驚きをもって資料と向き合ってくれている人がいたのが嬉しかった。従来の宮本常一研究は、主として既に印刷に付されている宮本の文章を組上にのせて行うものであり、その点では「書評」や「論評」の域を出ていないと感じるものが多かった。これに対し、今回の企画展で最も重視したのは、「一次資料の提

示と分析」である。宮本によって作成された調査資料はいずれもカタカナ主体の文字で整然と書かれており、判読するのはそれほど難しくない。それでいて大きな錯綜も見られず、田村善次郎氏が『宮本常一 農漁村採訪録』の刊行にあたって評価したように、「ノートを写しただけで調査報告として通用するものが少なくない」のである。カタカナで書いているのは、聞き取った要点を素早く記録することができ、また調査後の円滑な判読と整理にも適していたからだろう。現に調査資料には、原稿に起こすために整理を行った痕跡が随所に見られる。例えば、図2のノートの右上朱書きからは、本資料の整理を昭和24年9月29日に終えたことが分かる。これをもとに執筆されたのが「周防大島民俗聞き書き」だった（『周防大島民俗誌 続篇』に収録）。宮本にとって調査資料は、ひとり民俗調査の記録であるに留まらず、後に著作として報告することを念頭において作るべき基

礎資料でもあった。

しかしながら、宮本自身の手でついには公表されなかった調査も多い。それらは当館で25巻まで刊行している『宮本常一農漁村採訪録』によって補われつつある。けれども、まだ翻刻すべき資料は大量に残されている。今回の県指定資料に限っても、北海道の離島、秋田県檜木内村、長野県奈川村、愛知県名倉村、島根県田所村などの調査資料が未翻刻である。また、それ以前の問題として、未整理の資料が3500点ほど収蔵庫のなかに眠っている。そのなかには九学会連合による青森県下北半島の調査資料なども含まれる。宮本常一や農山漁村文化の優れた研究材料として提供できるよう、より一層の整理と公開が求められる。

前稿でも指摘したが、宮本の調査資料を紐解くと、彼が本当に現地を歩いて伝承者にぶつかり、記録を作成していたことがうかがえる。その確からしさは、各々が追跡調査をしてみることと検証

できよう。また、宮本の資料には、現実に営まれていた生活や生業の、即物的・計量的・行動的な情報が頻出する。そのなかには伝承の消滅により、今日では調査のできなくなったものも少なくない。その点で、彼の資料は、わが国の物質文化に関する情報の宝庫といえることができる。自らの仮説を検証し、その専門領域を深めるべくして宮本の資料にあたれば、必ずや新たな発見が得られるはずだ。今回の企画展では、そうした宮本の資料がもつ可能性を示すことができたと思う。

最後に、当館は平成16年5月18日に開館したが、令和6年で開館20周年を向かえる。今回の企画展で得た所感を大切に、より効果的に宮本の学問的な魅力を示せるよう、従来展示の見直しを進めていきたいと思います。

〈新刊紹介〉 畑中章宏著 『今を生きる思想
宮本常一 歴史は庶民がつくる』

徳 毛 敦 洋

(宮本常一記念館職員)

宮本常一といったら何を連想するであろうか。

キーワードとして「旅」「世間師」「庶民」「写真」「聞き書き」などがあげられるだろうか。多くの旅や人々への聞き書きをはじめとするフィールドワークを通して地方の歴史や文化を明らかにした民俗学者でもあり、その識見を元として地域の活性化などを考える実践の人であるのが特徴であった。

本書は宮本を思想家とし、その思想信条を六章構成で、著作などを中心に追ったものである。まず本書の目次を見てみよう。

はじめに 生活史の束としての民俗学

第1章 『忘れられた日本人』の思想

第2章 「庶民」の発見

第3章 「世間」という公共

第4章 民俗社会の叡智

第5章 社会を変えるフィールドワーク

第6章 多様性の「日本」

著者は民間伝承や産業、習俗など幅広くテーマとして扱う民俗学者の畑中章宏氏である。他の著作では『『日本残酷物語』を読む』などが知られ、宮本常一に限らず柳田国男や折口信夫など他の民俗学者にも明るい。宮本の思想について結論として、心情的には「保守」、理性的には「リベラル」、共同体内での相互扶助などから「アナーキズム」とも親和性がある」ともする。

宮本は歴史をつくってきた主体として庶民に視点を置いた。圧倒的な支配者がいた時代でも歴史

をつくっていくのは庶民である。これらを解き明かさないと「私たちの歴史」はわからないとする。ところが庶民の側の現在まで伝わる資料は少ない。文字資料として残される資料は支配者側のものが多い。1章から4章までは主にこの視点をおく経緯が述べられる。

また、庶民が生活していく上で形成される共同体といえ、閉鎖的で伝統的なものをイメージしがちであるが、宮本はそのなかにおいて「世間師」と呼ばれるような共同体の外に出て見識を高めて共同体へ新しい知識を吹き込んでいく「世間師」と呼ばれる存在に着目した。この人たちによって新しいものを受け入れることのできる公共性を担保しつつ、「寄り合い民主主義」の項でみられるような伝統的な共同体経営が続いていたのが実態であったのだろう。著者もこの「世間師」たちが果たした役割について考えていくことが大事であると結んでいる。4章以降は宮本が実践したフィ

ールドワークの方法論などを著述する。

柳田国男とのつながりや、当時の歴史学・民俗学の潮流にふれているのも本書の特徴かと思われる。戦後歴史学の潮流は戦前の行き過ぎたイデオロギー面への反省から、史料を中心とした実証主義が主流となった。同時に家父長制的な面が批判され、マルクス主義的な階級闘争史観も見られるようになっていく。支配者と支配されていた側との相克という見方である。被支配者側は搾取されていたという一面だけがクローズアップされるようになっていた。こうした学会の流れにあっても宮本の視点は常に庶民の側にあつた。「昨日まで忘れられていたものが、今日ふたたび民衆の意識にのぼってくるのは多くの場合不幸なできごとを媒介としていた」という表現であらわされる。相克として残された資料には、不幸な面以上に、とりあげられない、あるいはゆがめられて伝わっている点にも意識をもたないといけないのである。

その民衆の歴史を明らかにするうえで、柳田国

男や折口信夫など民俗学は民間伝承などを中心としたものが多かったが、彼ら以上に宮本は民具からのアプローチを目指した。民具は収集・計測するだけではだめで、狭山茶の茶器を例にあげるように生産地消費地からの距離など収集地の特色をはじめ他の学問分野をまきこんだ総合的な視座に立たなければならぬと宮本は指摘している。

師事した渋沢敬三の言葉である「傍流を意識すること」や上阪する際の父親からの十か条など宮本にとって欠くことのできないエピソードなどをまじえ、随所に中央と地方・移民受け入れなど現代的な課題をいれながら現代に通じる宮本の思想を著述している。宮本常一の考えや背景、当時の民俗学のことを知る入門書として、是非手にとっていただけばと思う。

【書誌情報】

新書判、本文110頁、株式会社講談社、

2023年5月刊、本体価格800円＋税、

ISBN : 978-4-06-531783-9

【編集後記】

本号の前半では、内本良夫さんの棚田石垣に関するレポートを掲載しました。宮本常一は「旅にまなぶ」ことや「郷土での研究」の意義を繰り返し述べていましたが、このレポートではそれらが精力的に実践されています。お読みいただくと、宮本の目指した学問が、ここ周防大島で確かに根付いているというを感じとっていただけたと思います。後半では、今年の3月から5月にかけて開催した企画展「宮本常一関係資料を紐解く」を報告し、また5月に刊行された畑中章宏さんの書籍を紹介しました。今後も、周防大島と宮本常一記念館ならではの情報を発信していきたいと考えております。（編集担当・板垣優河）

文化と交流 NO. 7

二〇二三年一〇月一五日 発行

編集 宮本常一記念館

発行 宮本常一記念館

〒七四二―二五二二

山口県大島郡周防大島町

平野四一七―一一

電話・FAX

〇八二〇（七八）二五二四